
僕の隣の座席はドラゴンです。

ウォーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の隣の座席はドラゴンです。

【Nコード】

N5699J

【作者名】

ウオーズ

【あらすじ】

桜が舞い落ちる季節。俺は中学一年生に入学することになった。父親は家庭事情で実家から離れることができない。

なので俺は母親と二人で都会で暮らしている。父親がいないことはさびしいが母親と一緒にいるのでそこまでは感じなかった。

入学式から数日たったある日。中学校生活に慣れ始めた頃。"そいつ"はやってきた。

パロディネタ満載のハチャメチャ学園コメディ(?)もどき!
あなたはこの中のパロディを全て暴けるのか!?

設定資料集（前書き）

> i 7 4 1 9 | 1 1 8 2 2 <

設定資料集

さとうゆうじゅ
佐藤祐樹

名前の由来：どこでもいるという意味

武器：現時点では持ってない

宝玉：緑色

「何事もどうにかする能力」完遂力

成績は中の下。運動は中の上。勘が鋭く恋には疎い男の子。
なんか絶対この世界中のどこかにはいると思われる究極的に
地味な主人公。好物はエビフライ。病氣的に好き。
一応母と父と妹の家族構成。父と妹、母と佐藤で別々に暮らしてい
る。

あかいしあきひろ
赤石彰浩

名前の由来：赤い石を持つてるから。もともと別の小説の主人公だ
った。

武器：赤石七つ道具セブンスボール

・煙幕玉スモッグボール

・分散玉スプレッドボール

・分散玉バウンドボール

・跳躍玉デザートボール

・砂塵玉ウォーターボール

・水流玉フックボール

・取手玉

・?????

宝玉：赤色

「大地から飛翔させる能力」飛翔力

成績は下の下。運動は上の上。エロさに敏感なテニス部男子。どっちかっていうと佐藤より主人公属性。お気楽なイケメン。黙ってりゃ絶対もてるのになあ…。好物は焼きそば。弁当に毎回入れる。

母と父と弟と赤石と兄の構成。家族の頭の良さは赤石以外高い。

咲野莉子

名前の由来：花「咲」く 草冠の文字を適当に…

武器：炭鳶爪

刃でできたブーメラン。自在な回転ができるようなつくりになっている。

宝玉：青色

「身体能力を異常上昇させる能力」増体力

成績は上の中。運動は下の下（素）。料理が少し下手な陸上部女子。メインヒロイン（ヤンデレ）。初代に溺愛している。学年1の美女。家族は父のみ。母は咲野を産んだ時にそのまま死んでしまった。父がとてもまじめで家計を支えている。胸は貧しい。

竜野初代

名前の由来：「竜」の「初代」

武器：不明…？

ドラゴン：緑龍

無属性プレス、飛行能力、パワー、スピード

成績は上の中。運動は上の中。料理は少し得意な転校生。実はドラゴンになれる転校生。美少年顔。天然バカ。家族構成は明らかになっていないが多分全員死んでいる。

今は佐藤のマンションの隣の部屋に住んでいる。一人暮らし。

水野^{みずの}二代^{ふたよ}

名前の由来：「水の」「ドラゴンの二代」

武器：バトラー・チェーン

鎖に斧の先端がついた危険な武器。振り回して攻撃する。

ドラゴン：水龍

水属性ブレス、飛行能力×、パワー、スピード、水

中呼吸

成績は下の上。運動は上の中。裁縫が実は得意なギャル女子。

巨乳であるがゆえに水野の目の敵にされている。佐藤と同タイミン
グに

来た。現在、水野の家に居候させてもらっている。

アルバイトもしていたりと、ギャルと見せかけて忙しい。

炎野^{えんの}四代^{しだい}

名前の由来：「炎の」「ドラゴンの」「四代」

武器：三節刀^{さんせつとう}

刀身が三つに分かれていて自由自在に曲げることができる。

ドラゴン：炎龍

炎属性ブレス、飛行能力、パワー、スピード、耐

熱。

成績は中の上。運動は中の中。家事が苦手といっている割には以外
にできる

初代と一緒に転校する予定が別の学校にいていた。今は赤石の家
の近くの

ボロ小屋に住んでいる。ほぼ自給自足の性格をしている。油物全般が好きで
ちよつと無口な男の子。

かりたしゆんや
刈田俊哉

名前の由来：スポーツ「刈」り・「俊」足

武器：現時点なし

宝玉：現時点なし

成績は中の下。運動は上の中。足の速さには定評がある。もともと【エクストラ】。親は鍛冶屋をやっている。自身も一応剣の扱いに長けている。リアルが充実している。しねばいいのに。

あかしきあや
明色彩

名前の由来：「明」るい・「彩」り

武器：現時点なし

宝玉：現時点なし

成績は中の上。運動は中の上。学年二番の美女と呼ばれている。咲野とは幼馴染。でも元【エクストラ】。悲しいね。かなりの猫好きで猫をみると理性を失う。

せいやはるみつ
星夜春光

名前の由来：暗いキャラだけど輝く部分がある 星夜

武器：現時点なし

宝玉：現時点なし

成績は上の下。運動は中の下。ガンマニア。読書家。
どっちかという陰キャラ。元【エキストラ】。刈田や明色とは
仲がいい。よく三人でカラオケにいってるそうだ。ウラヤマシス。

ふじやまうんせん
藤山雲仙

名前の由来：富士山 ふじやま など山の名前

武器：現時点なし

宝玉：現時点なし

成績とか運動とかの前に体育教師。超熱血。得意種目は
テニス。…いや別にマイナス十度で蜷はとってないよ。
一応勉強もかなりできる。いや勝手にベットに寝ても無い。

設定資料集（後書き）

地理について

この世界は実は別次元のお話です！（日本じゃない）
そしてこの小説の世界では大陸が分断されています。

第一大陸：平和の大陸「フリース」

第二大陸：戦争の大陸「ウォズリク」

第三大陸：不明の大陸「アンノウン」

簡単に言うと、

初代たちは第二大陸のほうの出身です。

佐藤たちは第一大陸のほうの出身です。

この小説は第二大陸と第一大陸の小競り合いを書いた
小説となっています。

第一話「転校生」(前書き)

桜が舞い落ちる季節。

俺は中学一年生に入学することになった。

父親は家庭事情で実家から離れることができない。

なので俺は母親と二人で都会で暮らしている。

父親がいないことはさびしいが母親と一緒にいるので

そこまでは感じなかった。

入学式から数日たったある日。

中学校生活に慣れ始めた頃

”そいつ”はやってきた。

第一話「転校生」

そういえば自己紹介がまだだった。

俺の名前は佐藤祐樹^{さとうゆうき}。本当に地味な13歳だ。

得意な教科は理科と家庭科。部活は何に入るかはまだ決まっていな
い。

かっこいいといわれたことも無いがきもいといわれたことも無い。

変わっていることといえば少し気配を読み取るのと勘がすこしい
ところ。

運動もできるわけでもなく勉強も平均的だ。

そんな俺は今日もとても長い坂道を登っていつている。

この中学校は高校も繋がっていてさらにこの近くに大学もある。

近くの大学にはどうやら事件がおきたらしくて少しざわついていた。

まあどうでもいいけどね。

「おおーす。佐藤〜。」

後ろで大きい声でどことなく投げやりな声が聞こえる。

あかいあきひろ
赤井彰浩。勉強は俺と同じくらいでテニス部でそこそこできるほうらしい。

なかでも彼の放つサーブはひゃくはっ…おっとなんでもない。

「相変わらず意味不明なこと話してんなあ〜」

「だまれかす」

「なんだそりゃ。ぐぐれかすみたいだな。d m r k s」

「うつせええ!〜!」

実はというと中学で初めてできた友達だ。

急に話しかけられてそのまま打ち解けてそれからほとんどこの坂で出会うようになった。

暴言も吐いているけれど一番頼りになる奴だ。

「ど…どうしたんだよ…今日は無駄に叫ぶなあ」

「DAMARE!今日の俺は少し違うんだよお!」

全員の眼がこちらに向く。

俺は肩をすくめて身を隠す。

は…恥ずかしいっ…

「まったくどうしたんだよ…」

赤井は迷惑そうな顔をしながらつぶやく。

「いや…なんか嫌な予感がすごいするんだよ…」

「嫌な予感？」

「なんかとんでもない面倒ごと巻き込まれる…」

「ふーん…」

赤井が黙り込んだ。

おっ？こいつにしては珍しく考えてくれているのか？

「気のせいじゃない？」

期待した俺が馬鹿だった…

教室に着くと相変わらずのがやがやっぷりだ。

後ろで女子が騒いでいる。

俺はいつものように荷物をしまう。

荷物をしまうさい何か小さなものが転がり落ちた。

「ん？なんだこれ？」

拾ってみるとそれは何か六角形の石のようなものだった。

一体何なのだろうか。

一応取っておこうと俺はそれをズボンに滑り込ませておいた。

チャイムがなる少し前クラスの情報通が廊下から息を切らせて走ってきた。

「たいへんだ！転校生がくるぞ！」

「な」

教室が静まり返った。

「なにいいいい！！！！」

「男か？女か？」

「イケメンか？不細工か？」

「ペン回しできる？」

「カラオケいける？」

ざわざわと教室がうるさくなる。

チャイムがなったような気もするが声でかき消されている。

先生が入ってくる。

「お前らー席つけー」

全員眼を輝かせながら席に着く。

「今から転校生をしようk」「いよっしゃあああああああ！

！！！！」「……紹介する。」

うちの先生はこのように話をさえぎられてもノーリアクションで対応するからおもしろい。

「はいつてこい。」

ガラララッ

教室の戸が滑らかに滑る。

髪の毛はきらめいていて

瞳は青かった。

かといってハーフには見えないし

外国人でもなかった。

なんというか・・・とても不思議な感じがした。

顔も美形だ。

女子がキヤーキヤーと叫ぶ。

男子がうらめしそうににらむ。

「今日からこのクラスの一員になる初代竜野はつひらのくんのだ。皆仲良くしてやってくれ。」

俺はこいつに悪いイメージは持たなかった。

だがこれがとんでもない自体の引き金になるとは

「このときの俺はじっぱほども自覚していなかった。

へっっ

第一話「転校生」(後書き)

初めまして。Blast Warsと申します！
ぐだぐだな小説ですがよろしく願いします！

第二話「続・転校生」(前書き)

前回のあらすじ

俺はいつものように登校し

いつものように過ごした。

すると謎の転校生がやってきた。

学校に嵐が来る気がする。

気がするであってほしかったぜ……

第二話「続・転校生」

「それでは初代くんは佐藤くんの後ろの席へ行ってください。」

教室にゆっくりと足音が響く。

あいつは教室を見渡しながら歩いている。

嫉妬深い奴がこんな奴を許すわけが無い。

そう。この教室は戦場なのだ。

一日目からいじめは当たり前。

初対面の奴をいきなり「キモい」といってボコる奴等もいるほどだ。

まさに戦場。これは怖い。弾持って来い！弾持ってこーい！

少し足元を見てみるとなんとということでしょう。

通りやすかった机までの道が

足掛けが何十もしてありとても通りにくくなっているではありませんせんか。

ああ……コイツの人生大丈夫か？

まあ一応哀れんでおこう。

そう思っていたその時。

窓から急に風が吹いてきた。

暴風が吹いてきた。

「うおっ！」

「なにっ！」

「へあっ！」

「ふうっ！」

あまりの強さに本棚の本がぶっ飛ぶほどだ。

あまりに一瞬のことだった。

俺は何もいえない。先生もだまりっば。

女子はもうそのなかでかっこよくたっている初代にメロメロ状態で50%の確立で攻撃できない。

ついでに攻撃力も下がってぶっ倒れるやつもいる。

チャイムが鳴ったとき教室内の全員が我に帰った。

先に口を開いたのは初代だった。

「まったくちよっかいかけようとするから罰が当たるんですよ。」

確かに。本があたった奴は全員足をかけようとした奴だった。

俺以外にうなずいた奴はいた。赤井とか。

「とっ！とりあえず！本で頭打って重傷の人！何故か鼻血出して倒れてるやつも全員保健室にいけえ！」

「ねえねえ佐藤くん。」

初代が話しかけてきた。

「ん？どうした？」

俺は聞き返す。

「佐藤くんってさなんか今日拾わなかった？」

「は？」

「いや・・・だから・・・その・・・」

何を言ってるんだこいつは・・・

拾った？なんか拾ったかおれ？

あ そういえばこんなのがかばんに入ってたな・・・

そのことか？

「これか？」

俺はそれを出すことにした。

相変わらず何故かきらめいている。

「そう！それ！よかった・・・こんなよさそうな人が拾ってくれて

「！」

「はあ？」

「え……あ……その……コレを拾ってくれた……ひと……
えっと……」

何をコイツはいつているんだこいつは

頭のねじが何本か吹っ飛んでじゃねえか？

「まあとにかくよろしくお願いします！」

「……はあ」

どうやら俺の勘はこいつだったようだ確かに厄介そうだし。うん。
そうだ。違いない。

ダカラキエロ。オレノファン……

「ただいま」

家の戸を開ける。

あいにくまだ誰もかえってないみたいだ。

ああ・・・家事やら無きや。

今日は・・・11時帰宅かあ・・・

うちの母はかなり長く働いている。

過労でぶっ倒れそうなほど働いている。

本当に大丈夫？と聞くと。

「ああくんもつだめえ〜」

といつてくるから心配が心から消える。

きつとそれがあの人の強がりなんだろう。

そう思っているときインターホンがなった。

こんな時間に誰だろう・・・

そう思ってドアノブに手をかけたそのとき。

ぞわっ！

身の毛が全本逆立った。

なんだ？この殺気は・・・

とても人とは思えない。

俺はそう思い靴をしっかりと履くために使う棒（名前忘れた）を手
取った。

ガチャッ！ ブウン！ ゴスッ！

「がっ！？」

ふっ・・・やったぜ・・・

マンション狙いの殺人を犯そうとしている罪人を気絶させたぜ。

あとはコレを警察につうほ・・・

ここに来て気付いた。

こいつ転校生じゃねえか。

つづく

第二話「続・転校生」(後書き)

どもBlast Warsです。

相変わらずggdggdな雰囲気ですみません。

次も頑張ります。

第三話「棒と梅干」（前書き）

前回のあらすじ

「なぜ初代くんを靴を履くための棒で殴ったのですか。」

「ついむしゃくしゃしてやった。誰でもよかった。」

というわけでもなく間違えちゃったZ.E。

第三話「棒と梅干」

「ううん・・・」

「だ、大丈夫か？」

「なんか頭が割れるようにいたい・・・」

「き・・・きのせ・・・気のせいだ!」

一番初めに行ったようにすっかり殴ってしまい倒れてしまったようだ。

全くなぜ俺の家に着たのか・・・

ん?というかなんでこいつ俺の家知ってたんだ?

俺の頭脳は子ども見た目も子どもな俺の知能が冴え渡る!

こいつストーリーキングしたな!

「いや、僕君の隣の家に引っ越してきたんだ。」

外れました。仕方ないね。

「で今日はこつこつものを引越し祝いに持ってきたんです」

手渡されたのはずっしり重いビンだった。

中には梅干がずっしりだった。

・・・シユールですね。わかります。

でも梅干はちょうど切れていたからよかった。

「それじゃありがとうございます。」

こう見ると笑顔はきれいなものだった。

男でもイケメンとを感じるものだ。

「そういえば・・・」

初代がつぶやいた。

「佐藤君はお母さんが今いないの？」

痛いところをつかれたと思う。

まあ普通疑問に思うわ・・・

「いやお母さん夜遅くまで仕事するから俺が家事とか全部やってるんだ。」

「えっ……」

「あ、そんな悪いこと利いたみたいなこと思わなくていいぜ。毎度毎度だし……」

しかしそういつても初代の顔は暗いまんまだった……これだから困るぜ。

「じゃ……じゃあさ。僕家事手伝うよ。」

……なん……だと……今なんと言った……？

「大変そうだし。僕も暇だし。やるよ！」

……驚きの予想外展開！ありがたいです！

その後俺と初代は協力して皿洗い、洗濯などをこなした。

とても意欲的に働いてくれて本当にいいやつだと思った。

時計を見るともう8時だった。

「おいお前そろそろ帰らないとやばいぜ？」

「うん。そうする。」

初代は玄関まで走っていった。

いいやつだ。あいつは絶対いいやつだ。

「そ、そうだ！今日拾ったあの石なんだけど・・・」

「んあ？」

「無くさないでね・・・」

「いやつだと思っていたが・・・」

「やはりコイツはおかしな奴だ。」

「そう思いながら俺は寝た。」

しかし次の日から俺の生活はイッペンするのであった。

俺の予感は的中し

それに対して俺は夜早くに寝ることになった。

第三話「棒と梅干」(後書き)

どもWarsです。一応この小説 自分のサイトにも掲載しています。

第八話までこっちにのせたらこっちから先に書いていきます。

つまり最新更新はこっちからってことになります。

そこのところお願いします。

第四話「ジエイ子」(前書き)

前回のあらすじ

こじで一句

宿題を

やるのを忘れた

めんじいのお

第四話「ジエイ子」

「ぬわあああああ！」

俺の名前は佐藤。相変わらず全力ダツシュで坂道を通学中だ。

宿題終わらせて頑張って通学中だ。

これ絶対遅刻だな。

「間に合う！絶対間に合う！絶対に！」

「ちょ ちよつと佐藤君！」

後ろから昨日来た初代とかいうやつが呼び止める。

お前も遅刻だろが！周りに誰もいないし！

「ま・・・まだ六時だよ！」

どう見てもありがちです本当に有難う御座いました。

誰もいない教室は静かだ。

俺と初代だけ。

これがもし女とだけならよかったんだけどな・・・

そう思ったとき机の中に何かが当たった。

(こ・・・これは!!!)

佐藤くんへ

ら・ぶ・れ・た・あ まさかの

おおおおおおおおおちつけ。

まずは素数を数えて・・・いやそれどころではない・・・

とりあえず内容を読もう・・・

「もし今日速く学校に来たのなら是非あってくれませんか
理科室で待ってます。」

早起きは三文の徳というのは本当だな。

「ちょっと俺はトイレにいつてくるぜ！朝だからな！ついてくんなよ！」

「うんいつてらっしゃい。」

こいつ……スルーするなんて……まるで俺が馬鹿みたいじゃないか！

せっかく振っているのに。このやるう……

まあこいつももうすぐすれば俺を追いかけてくるだろうな。

そして俺は理科室についた。

がらがらと戸を開けるとそこには一人の少女がたっていた。

そいつはなんとうちのクラスナンバー1の美女

咲野莉子さきのりこだった。

わーい、俺って勝ち組？

「あ……あの佐藤君だよ……ね？」

「あ……うん」

喉が詰まる。

「佐藤君ってあのさ……最近さ……」

「え……」

「初代君と仲いいよね？」

……は？なんでそこで初代？

そのとき！俺のイメージーションはどんどん深まった！

(初代君の電話番号聞いてもらってもいい？)

これが俺の考える未来だ！

あながち間違っではないと思います！

「そ……そうだけど……」

あれ……目から汗が……

そのとき彼女が口から発した言葉は俺の予想とはまた違うものだった。

「やっぱり……」

「へ？」

「ここで殺すべきかも」

オーケー。状況を説明しよう。

その女が持っているのはなにやら武器のようだ。

なんというか……ブーメランみたいなもの？

そしてその目の前に俺がいて。

そして女がブーメランぽいものを投げて……

そのブーメランは刃でできていて…… あれ？

「……！！ぎゃあああああああ！！！！！！」

制服が切れた！おっそろしい！やせてよかった！

「な・・・なにするんだ！銃刀法違反だろそれ！」

咲野の手にブーメランが戻る。

「ここであなたを殺さなきゃあなたも死ぬし初代も死ぬ。
でもあなたを殺せば初代は生きるのよ！」

「なるほど。」

ビュッ。すぱっ。

なんとということでしょう。

ベルトの鉄の部分が横に真っ二つ！

「ちょちょよ！！それひとつつかうもんじゃないんじやないのか！？

SYれにやらんでしょ！」

鉄が切れるのを身に受けたら・・・ 冗談じゃない！

「私の宝玉の力は”身体能力を上げる”！」もじりとびつめ 炭鳶爪”の餌食になり
な！」

ひゅっ！ すぱっ！

炭鳶爪が理科室のいすを真っ二つに。

いすに当たって戻る軌道がそれで天井に突き刺さる。

しかしそれをいとも簡単にジャンプして

天井まで飛びそれをとる。

どうやら宝玉とやらの能力は本当のようだ。

顔との・・・顔とのギャップが激しい！！

どうしろと！

考えている間に今度は上からブーメランがふってくる！

「ぬおおお！上から来るぞ！気をつけろ！」

「微塵切り・スライス！」

縦に回るブーメランなんて聞いたことがない！

もう夏服はあちこちがびりびりだ！

「私に勝つんだったらあなたも宝玉もつかったらどう？持っている
と思うけどね」

ビシイという効果音がいりそうな感じに赤い石を突きつける。

ん？ああいうの俺も持ってなかったっけ？

ポケットにはあんな感じの石が入っている。

しかし・・・

こんな中二病設定でいいのか？

本当にいいのか？

これ始まつたらもうやめれないぞ？

「宝玉よ！俺に力を！」

一瞬教室が光で照らされた。

「何！？なぜあなたが宝玉を！」

「あ・・・あいつから渡されたんだ！」

「な・・・なんですって！？ それじゃもっと殺みなきゃ！」

うう・・・もう・・・光っただけかよあいつみたいに超人的能力を得れないのか・・・

ざんねん！わたしのがっこうせいかつはおわってしまった！

ビュッ！スパッ！

ん？俺の腕が切れたと思ったたら別の何かが切れたぞ？

これは・・・薬の瓶だよな・・・

ラベルには・・・えっと・・・

「クロロホルム」・・・だと？

クロロホルム (chloroform) は化学式 CHCl_3 で表されるハロゲン化アルキルの一種である。IUPAC名はトリクロロメタン (trichloromethane) であり、トリハロメタンに分類される。広範囲で溶媒や溶剤として利用されている。

Wiki参照なんだが・・・簡単に言うと麻酔ということだ。

これのおいをかぐと眠ってしまうというのをよく聞きますね。

うん。この瓶の液は飛び散って俺の顔に。

咲野の体には戻鳶爪の回転で液が飛び散り顔についたようだ。

「……………!! ふえ……………」

ばたん！

「やった……………倒した……………」

ばたん！

両者引き分けってやつかな。

後で俺だけ怒られたけどな！

つづく

第四話「ジェイ子」(後書き)

クロロホルムじゃ人は眠りません！
やっっちゃだめですよ！

自分のサイト：<http://pushwars.tuzikaz.com/>

第五話「真相・・・？」（前書き）

前回のあらすじ

クロロホルムでは人は眠らない。

第五話「真相・・・？」

先生から怒号が飛んできた後

俺は無事教室から出てきた。

うちの学校は先生がやけに怒るのだ。

仕方ないね。

「へ・・・へヴィだぜ・・・」

廊下に出るとそこには咲野がつつむきながら立っていた。

元はといえばてめえのせいだこのやるうとでもいいかったが

やはり美少女。おこる気が引けてしまった。

「さつきはごめんね。」

「ま・・・まっただせ・・・」

一応これくらいは言わせてもらった。

しかし俺はなんで殺されかけたんだっけ？

「でもやっぱりここで殺さなければ初代君が死んじゃうから・・・」

そつだ今思い出したぞ。こいつはヤンデレだったんだ！

「ふ・・・二人ともー！」

廊下の向こうから元凶・・・？の初代が走ってきた。「

「ど・・・どうしてこうなったんだよ！」

「え・・・どうして初代君がこんなところに」

どうやら咲野は初代にほれているようだな。

「え・・・ちよ・・・きゃあああああああ！！！！」

・・・重症だな・・・

咲野はすごい勢いで廊下を走っていった。

「・・・ねえ・・・僕悪いことした？」

「恋は罪だぜ。」

昼休みになった。4月の温かな風が流れている。

「……馬鹿かお前？」

「いや、本当だって！今はちょっと諸事情があって見せれないけど……」

こいつの言ってることは本当にぶっ飛んでいる。

やっぱり俺の勘は当たっていた。何でこんなやつに絡まれたんだ……

「いや普通信じられねえっつの。お前がりゅ……」

「まったあー！」

ズツパァン！

めちゃくちゃ速いスピードで戸があげられた。

そこには簡単に言つとちゃらちゃらした女子がいた。

ガラスにひびがはいっている。ちょ……俺が怒られるかもしれないだろ！

「初代君の話は本当よー！」

いきなり何言ってるんだ。てか誰だあんた。

U
U
U
U

第五話「真相・・・？」
(後書き)

新展開になれ！

次回ようやくタイトルの意味が分かると思っよ？

第六話「真相・・・！」（前書き）

前回のあらすじ

窓ガラス割ると先生って

微妙な怒り方をする気がする。

そしてなぞの女子がやってきて学校に嵐の予感。

第六話「真相・・・！」

「とりあえず私の名前を言うわ。水野二代。」

みずのふたよ

見た目に似合わず名前が・・・よくもないな。

「ちょ・・・ちょっと、無理やり引っ張らないでよ!」

よく見ると咲野が引っ張られている。

「ここじゃ狭いから運動場にいきましょ!」

「いや次の時間理科だからあまり外に行ったりすると洒落にならん・・・」

「うっさいはげ!いいからいくぞ!」

・・・最近の女はこんなうるさいものか・・・

運動場のど真ん中に俺たちは立っている。

・・・正直めっちゃはずい。三年生もろこつち見てるし・・・

いやだいやだ 理科室遠いからかえらせろよ・・・

「さて、お互い【宝玉】を出してもらいましょうか。」

こいつは自分がえらいとでも思ってるのか？

同級生だぞ馬鹿野郎。

「ほづぎよく？これのことか？」

俺は仕方なくポケットに入れていた緑色の石を出した。

するとなぜか初代はそれを手に取り、

耳の後ろにそれを運んだ。

カチッ

・・・人間の体からは聞こえてはいかんぞ今の音は。

「よしはまったみたい。もうすぐなるからね。」

初代はそういつて目を閉じた。

その瞬間。

ゴウウ！　すごい風が吹く。

アニメなどで主人公が覚醒したときのシーンみたいな感じである。

「ええええ!!ど、ど、どという理屈だこれ!?!」

「それじゃ私も!」

そういつて水野も初代と同じことをし覚醒シーンに入った。

こゝこゝ心の準備がまだできてない・・・

まぶしい光が辺りを覆った後、

そこには初代と水野の姿はなかった。

代わりにいたのは

二匹のドラゴンだった。

片方のドラゴンはなんていうか・・・オーソドックス?

緑色の鱗に黄色い腹。しかし予想以上にスリムで体格がよく小さめである。

もう片方は水色の鱗。足は小さく翼がやけにでかい。

「・・・・・・・・」

俺、いわゆる佐藤絶句。

生まれてこの方ドラゴン見るの初めてだぜ？

よく出没するとは知ってるが

それはもっと危険地域だろ？

「うはー、いつ見てもすごい……てか初代君かっこいい……」

咲野……俺の中でのお前のキャラはおしとやかなキャラだったが違ったのか……

俺がすげーと放心状態で眺めていると

「おい見ろよ！校庭にドラゴンがいるぜ！」

三年生がざわめきだした。

あれ？やばいんじゃない？

「おい！お前ら！早く人間に戻らないと……」

「なってるよー」

・・・あれ？いつのまに？

そこには覚醒前の光景はありのままに流れていただけだった。

チャイムが鳴り響いた。

「・・・・・・・・！！理科だあああああ！！！」

俺たちは走った。命の限り走った。だめだった。

「まあ何でこうなってるかはいえないけどこういつわけ。」

もう信じるしかないな。俺は悟った。

大体知り合いが実はドラゴンでした^^ というのは普通信じれないが

見てしまったものは仕方がない。

「まあこれからもよろしくね！」

「だが断る

・・・そういえばそれって通学に使えないの？」

「だめだよ！もろバレじゃんそれ！」

初代は俺に突っ込みを入れるが

「校庭のど真ん中でやったやつに言われたくない！」

むしろ俺が言いたかった。

あと覚醒シーンで驚くのもいいけど

あれってやばいな。小石が飛んできてめっちゃくちゃいてえ。

つづく

第六話「真相・・・！」（後書き）

七話を投稿したらしばらくとまります
ごめんなさい。

第七話「班決めってテンションあがるよね」（前書き）

前回のあらすじ

理科の授業に間に合わなくなったので
理由として「何類かわからない動物とコミュニケーションとってま
した。」
といたら上皿天秤で殴られた。

第七話「班決めってテンションあがるよね」

「……眠い」

あ、ありのまま今おこったことを話すぜ！

俺はぜんぜん眠くならないので

おきて本を読んでいたら

朝になっていた。

「眠そうだな、大丈夫か」

赤石は普通にしゃべりかけてくる。

しゃべりかけんな。眠いだよ。

「おっはよー、佐藤君。」

初代も明るく挨拶をする。

いい心がけだ！ちなみに作者は挨拶標語で賞を取ったことがあります。

だが今俺の耳元でするなはげ。

「……おはよ」

咲野も小さい声でつぶやく。

そつそつそれくらいでお願いするぜ皆さんよ。

そんな時馬鹿でかい息を吸う音が聞こえた。

「おっはよおおおおおおおおおお！！！！」

「……………！！！！！」

……わざわざ耳元で叫ばなくなっただろ水野……

「目、覚めたか？」

「テンションが冷めたわ。」

「だれがうまいことを言えと」

「うまくない」

「えー皆さん連絡で知ってたのとおり交流合宿が」「」「しゃあああああ
あ！！！！！」「」「
……………あります。」

うちの学校ではGWの前に合宿があります。

この合宿はとにかくいいったらありゃしない。

「……チッ」

……何かやりたいことでもあったのだろうか。

そして俺たちはいつの間にかこんなに仲良くなったのだろうか。

まだ五月だっていうのにNE。

てか何気にあいつらそろってんじゃん。

……それなら俺も入ってもいいかな。

そう思ったとき ポケットで何か起きたのを感じた。

そしてやってきました交流会宿。

「そっぴゃお前らなんで俺と一緒にいたいんだ？」

「いや佐藤君にアウトドア全部任せようかと。」

……パシリですかそうですか。

「佐藤君。ちょっとこっちにきて。」

先生が急に呼んできた。微妙な表情だった。

「実は六班の子が全員休んじゃってね。

七班に移動してもらうね。仲よさそうだし。」

・・・は？What? Why? White?

「七班に移動してもらおう。」

・・・つまり俺は進んでパシリにいけど？

あいつらは手招きしている。

他のやつらはくすくす笑っている。

俺の視界は曲がった。

うそだ・・・！うそだ！いやだ・・・！いやだ！

俺はちからをこめて叫んだ。

「畏だ！これは僕を陥れるための畏だ！」

「いや、現実だ。」

「ち・・・ち・・・ちっ！ちくしょおおお！・・・おまえらあ！ばかだ
あああ！・・・」

五月の空。

俺の大声は山まで届いた。

つつく

第七話「班決めてテンションあがるよね」(後書き)

明日テストだあ・・・モズーン

とにかくがんばってやっています。

あとしばらくこれで行進止まります すみません ><

第八話「バス内殺人事件」犯人は佐藤だ！」 (前書き)

前回のあらすじ

咲野・初代・水野「佐藤って・・・おもしろ！」

第八話「バス内殺人事件」犯人は佐藤だ！」

バスに乗った俺たち。

隣の座席は初代だった。

「わあ山がきれいだよ佐藤君！」

初代ははしゃぐな馬鹿。

「……」

咲野は無言で髪を引っ張るな馬鹿。

「……」

水野は何で音楽プレイヤーを持ってきているんだ馬鹿。

「HEY！エブリバディ！」

ブリッ！

「俺の座席のエチケット袋をやぶるな！どこからとった！」

「ごめんー 音楽聴いてると忘れちゃうもんよ」

うぎい……

ちなみに座席は

俺が右前で隣に初代。俺の後ろに咲野、咲野の隣に水野って感じだ。座席の間はとても狭くさつき言ったようにエチケット袋に手が届くぐらいの小ささ。

バスは小さいのは仕方がない。しかし俺たちが今から行くところは高級ホテルなんだから・・・こういうところで微妙に経費を削減しなきゃ・・・

「HEY！エビリバディ！」

ビリリッ！

「俺のしおりを破るなああああああああああ！・・・！」

もうやりたい放題だこいつら・・・

嫌気が差しながら初代の指差した山並みを見てみた。

青々をした山並みがそろってそこに丁度太陽が重なり

まるで絵のような美しさをだしていた。

素直に俺は感心した。こんなバス旅もいいかもなあ……

「ねえ佐藤君……」

向こうが楽しみだな……二日目はともかく一日目はホテルだしなあ……

「ねえ佐藤君……ちょっと」

ここまでくると楽しくなってくる。

「ちょっとまじで佐藤君……」

「うつせえんだよお前は！」

バシッ！俺は初代の延髄にチヨップをぶちかました。

「無理やり俺の見る方向を決めて

感傷に浸っている俺を邪魔し

拳句の果てにはお願いだあ？なめんじゃねえぞ！」

バシッ！バシッ！バシッ！

何発も延髄にチヨップをぶちかます。

「ちょ……まじでやめて……」

「そんな強くやってないから別にいいだろ！」

「いや はきそ まじで」

俺は頭が真っ白になりかけた。

ここで吐くだと・・・とんでもない！

俺までもらいげろをする恐れがあるじゃねえか！

俺はすかさずエチケット袋を手を取った。

そしてそれを初代に渡し、俺は背中に手を当てた。

(左手は・・・そえるだけで・・・)

とにかくさすってやった。

さあ今ならOKだ！

しかしここで気づいた

さっき水野にエチケット袋を破られたことを。

・・・ご想像におまかせします・・・

「……ごめんね！本当にごめんね！」

「本当にごめんだよ！」

休憩所についた俺達。

俺はとりあえず靴を洗い、初代は口をゆすいだ。

「酔うのなら酔い止め飲んでけよ……」

「ごめんね……本当にごめんね……」

まったく……きたないぜ……

「ええーそれじゃあ駅についたら新幹線に乗り換えて

ホテル前まで一気に行くぞー。」

「わあい^^」

「はぁ……ひどい目にあつた」

「初代君のゲ……うらやましい」

どこがだ！俺は心の中で鋭い突っ込みをいれた。

「HEY！シャルウィダンス！」

ビリリイ！

「だから俺のしおりをやぶるなああああああ！！」

ホテルについてからが不安になってきた・・・

恐怖を覚えながらバスに揺られている俺。

この揺れで心が落ち着けばいいのに・・・

「そっぴや佐藤君」

「ん？」

青ざめた顔の俺に初代が顔をのぞいてくる。

「新幹線にのつたらさ。カードやらない？トランプ持ってきたんだ。」

トランプ・・・へえ？

こいつにしては気がきくなあ・・・
まだあつてそんなに時間たつてないけど。

「いいぜ。俺はトランプ好きだしな。何をするんだ？」

「大富豪」

大富豪。それはトランプゲームで作者が最も好きで最も燃えるものだと思っているものだ。

「おもしろそうだな・・・やってやるっじゃねえか！」

「私もやる！」

「HEY！私も！」

こうして駅につき新幹線にのり

新幹線のテーブルは

大富豪の戦場と化するのだった・・・

第八話「バス内殺人事件」犯人は佐藤だ！」
（後書き）

ども。Warsです。

テストが終わったと思ったたらまたテストです。

しばらく更新が停滞します。

ごめんなさい。

第九話「闇のゲーム」(前書き)

前回のあらすじ

大富豪で戦うことになった四人。
しかしそれは裏で仕組まれた闇のゲームだった！

第九話「闇のゲーム」

揺れる音すら聞こえない新幹線。

新たなテクノロジーを搭載している新幹線はやっぱり格が違う。

このあたりの科学力は世界一かもわからんね。

「むちゃくちゃな文だな・・・」

「ほっといてくれ。一回書き直しになったんだから。」

「まあどうでもいいから大富豪やろう。」

佐藤から全員にカードが配られる。

俺の手の内は・・・

！！ 2が一枚もない！

しかし代わりにキング三枚クイーン三枚ジャック三枚・・・

「おめえ絶対仕組んだだろ！」

「違うよ！僕だって偏ってるんだから！」

くそがつ・・・

「じゃあ私が一番初めね」

水野が率先してやりだした。

「それじゃ開戦の合図を出しましょうか。」

「うの！」

「それは別のゲームだ赤石。」

「やあやあわれこそは！」

「それは戦国時代だ初代。」

「デュエル！」

「それは遊　王だよ咲野さん。」

「いやデュエルであってるよ。」

「お前らはバカだ。」

現在の状況：咲野が一番で初っ端から革命

「……7を四枚だして……メ木几ころ又すぞ？」

「うるさい！私だって好きでやってるんじゃないんだから！」

おいおい……俺のキングとジャックとクイーンがゴミ屑同然に……

このままではやばいって。

「んじゃ私6。」

「僕5。」

「奇遇だな4。」

水野・初代・赤石 はカウントダウン形式で出していく。

ふぎけるな……！！今の俺には3は一枚しかない……！！

ここで出せば今後ピンチ間違いなし……！！

しかし今出さないと今後ピンチの恐れあり……！！

どうする……！！

ざわ・・・ざわ・・・

「決めたっ！ 3！」

とりあえずこれで何とか先手を・・・

「じょーかー」

咲野さん自重してください。

現在の状況：咲野 2枚 水野 2枚 初代 2枚 赤石 2枚
俺 9枚（王家セット減らせてない）

くそがつ・・・

一向に俺の番は回ってこない っていうか出せない。

「クククツ・・・どうしたのかな佐藤君。」

「僕たちには王家は必要ないんでね・・・」

「君に全部預かってもらったよ・・・」

「なっ……!! てめえら! やっぱり仕組んでやがったのか!」

「いやノリでいっただけ」

「殺すぞ」

勝敗：俺の大敗北

いやこれは無理。だってね。考えてごらんよ。

革命がきたならかなりの弱さを誇る王家が9枚あるんだよ? なんなんだよ。

「んじゃ負けたからxゲームね。」

「そんなのなかっただろお前!」

「いやいや ×ゲームだよ佐藤君」

「何をする気だ何を。」

全員が不気味な笑みを浮かべている・・・

俺は悪寒を感じた。後ずさりをしようとした。

しかし後ろはシートだった。

これ以上は下がれない。

だが恐怖感を感じた。

下がりた。下がりた。ただそう思った。

ゆらゆらとつごめく指が俺の肩をポンとたたいた。

「ゴムパッチンで。」

「・・・は？」

ガチッ

「ほいほいほほい！はひひへんはよー！」

「はいはい噛んで噛んで〜！のびるよのびるよー！」

「何で新幹線の中なのにこんなことできるんだろっ……」

それは俺がつっこみたい！

「それじゃはなすよ〜」

「はいほー！」

手を離れた瞬間は刹那の出来事だった

ぐおおとゴムが高速でこちらに迫ってくる。

顔をそらそうとするがかんだままなのでゴムもそれる。

これは完全にヒットですね。

ばちーん

第九話「闇のゲーム」(後書き)

テスト終わって一気に更新できるぜ！
今後頑張って小説をかいていきたいです！

第十話「バイキングは皆食べれると思っている時期が私にもありました」

(前

前回のあらすじ

×ゲームを考えるのに一時間かかった俺であった。

「アホだろ作者・・・」

「ほ、ほっというてよ！」

で、ホテルに着いた。

【ホテル・インポータント】

「作者は英単語の意味を知っているのか？」

「ね、寝ることが大切って意味だよ！」

第十話「バイキングは皆食べれると思っっている時期が私にもありました」

ホテル・インポータントについて荷物をいれそれぞれの班ごとに部屋に入った。

中はなかなかきれいな部屋でとても大きい窓があり、その隣にベッドが置いてある。

観葉植物は昼下がりの明かりに照らされていた。

「なかなかいい部屋じゃないか」

「とくに大きい窓があり、その隣にベッドが置いて…」

「それはさっきの説明の文を朗読してるだけだね。」

赤石はきてそうそうポケっばなしだ。

「すみませーん。16インチテレビとスピーカーをおねがいします。」

水野さんは相変わらず絶好調だね！

そして荷物の整頓が終わった後

先生からこの会の意味とかなんかを適当に聞き流しているうちに
もう晩飯時になっていた。

こんな風にテンションが上がっている時は時がたつのはとても早く
感じる。

「で、バイキングなんだけど・・・」

全クラスはやはりたくさん的人数だ。

皆席についていただきますを今か今かと待ち望んでいる。

「皆何食べる？」

俺は一応聞いておく。ちなみに俺はエビフライだ。

俺はエビフライがめちゃくちゃ好きなんだ。エビフライだけ食べられ
ればいい。

皆は何かな？ どうせハンバーグとかだろ…

「全部」

…流石に自分の耳を疑った。

「もう一回お願いします」

「全部」

「・・・作戦はあるのか？」

俺は反対はしなかった。なぜならエビフライが食べたいからだ。

エビフライならフライバット一つは食える。

しかしどうやってやるんだ？

「佐藤君。今宝玉って持つてる？」

「ん？ああ持つてるけど…いっておくけど竜に変化するなよ。

エビフライが消し飛んでしまう。」

「その宝玉を額に当てて好きな食べ物全てを手に入れたい！って願
つてくれない？」

「…どういつ作戦なのだろうか…」

まあいいやあいつらの言うとおりにしよう。折れた俺は言われたと
おりにした。

(エビフライエビフライエビフライエビフライエビフライエビフライエビフ

イ)

「まだだよ！まだ足りない！」

(不確かな俺のエビフライ摂取量にポダ宣言！)

「もう少し！もう少し！」

(おらにエビフライをわけてくれー！)

「あと一息！」

めんどくせえ！そう思った俺は逆転の発想をすることにした。

(食べ物全部エビフライになれ！)

宝玉が光り輝いた気がする。

「いただきますーす。」

いただきますすの挨拶が響いた。

しかし俺たちの足は動かなかった。

何が起こってしまったのか全て知っているからだ。

「な！なんだこれは！」

「ソーセージからハンバーグ へはんつぶから汁物全てがエビフライになっている！」

「エビフライ地獄とはまさにこのこと……」

「ああっ！！そこはだめえっん！！エビフライそんなところに入れちゃだめええええ！」

ああ……俺の目の前にはエビフライがこんなにたくさん……

「俺は先に死ぬ……わが生涯にいつぺんのくいな……し……」

ガクッ

「死ぬな佐藤！傷は浅いぞ！」

赤石が珍しく突っ込みをいれた。

その後の俺は100本のエビフライを一気に食べて

クラスの中で伝説となっていた。

しかしそのことはあまり覚えていなかった。

第十話「バイキングは皆食べれると思っている時期が私にもありました」

(後

エビフライおいしいよねー

なんかどんどん評価されていて本当にうれしいです。

ありがとうございます！

今後も頑張って執筆していきたいです。

第十一話「闇のゲーム テイク2」(前書き)

前回のあらすじ

佐藤君はエビフライが大好物だった。

第十一話「闇のゲーム テイク2」

「いったい何を願ったの佐藤君！」

「そうだぜ！大量のエビフライで死ぬかと思った！」

「俺はもつとほしいんだ！」

くそっ！こいつら！エビフライの良さを何も分かつちやいなえ！

一応心の中で突っ込んでおいた。まあ俺が

食べ物全部エビフライになあれ^^なんて願ったからこんなことに…

「こつなったら罰ゲームとして佐藤君も混ぜて皆で一緒にUN を
しよう！」

「それ隠せてないきがする。」

「ハテのごく！でも同じ事やってたじゃないか！」

くそっ！こいつら一般人には分からないネタばかり…！！

そしてまたカードが配られる。

俺の手持ちは…

！！ 数字カードしかねえじゃねえか！

「おiiiiiiiiiiiiiiii！！また仕組んでんだろ！」

「僕だつて偏つてんだから！」

何なんだ！俺運が悪すぎるだろ！くそがつ！

「くつ じゃあ咲野 俺 初代 水野 赤石の順番でな！」

「わかつたわ。」

ふう。無理やり順番を先にさせてもらったぜ…これでもう少しはやりやすいはず…

一番初めは赤の6！よし！6なら四枚ある！ここで一気に差をつけて…

「赤のリバー、青のリバー、緑のリバーを同時だして順番逆周り。」

何もいわずにダンプカーに引かれる咲野。

「いけ！俺の+2攻撃！」

「負けないわ！私の+2受け流し！」

「僕だつて！守りたいものがあるんだ！+2受け流し！」

「俺の+2ねえから！」

現在の状況

咲野：2枚 赤石：4枚 水野：3枚 初代：5枚 俺：12枚

ふざける…！！

「あ、ちなみに負けたらまた罰ゲームだからね。」

「一応聞いておこう。内容は？」

「また今度女装。」

「うおおおおお！！まけてたまるかぁ！」

「残念だったな佐藤！てめえはそこでくたばってな！」

「佐藤君が死ぬまで+2をやめない！」

初代の発言

初代がぶっ壊れちまつてる…

しかしこの12枚… ほとんど数字しかないもんなあ…

ただ一ついえることが6が六枚あるということかな…

さっきからスキップで飛ばされまくってるもんで仕方がない。

「あれ…出せるカードがない。」

「私もだ…」

「くそっ…せつかくUNOっていったの…」

「じゃあ僕はここらで色を変えよう。」

初代…！お前はとことん空気の読めるやつだ！

頼む…黄色以外を選べ…！頼む！

「じゃあ緑色！」

結果

咲野・一位 水野・二位 赤石・三位 俺・四位 初代・五位

初代には悪いけど最下位は逃れたぞ！

やったね！

「んじゃあ四位と五位の佐藤君と初代君は今度女装ね！」

初代ざまあ W W W くそざまあ W W W

俺ざまあ W W W m g) ・ o ・ (プギヤー W W W W

…えっ？俺も？

「おいお前…ちょっと上のほう読んでみる！最下位っていつてんじやねえか！」

「今変えた。」

今てお前…

「なんでこっつなるんだよ……」

「お前はしょせんヘタレなんだよ。」

なきたくなった。

第十一話「闇のゲーム テイク2」(後書き)

小説書くのが楽しくなっています。

今後もどんどんやっけていきたいです。

第十二話「痙攣の意味〜あれ？シリアス展開？」

(前書き)

前回のあらすじ

咲野は運がいいことが分かった。

そして俺が果てしなく運が悪いことが分かった。

「そついえば背景つけてみたんだどうよ？」

「作者。これはちょっと危ないんじゃないか？」

「mjdd?じゃあ直すよ。」

第十二話「痙攣の意味〜あれ？シリアス展開？」

「おらあ！てめえら！風呂だぞお！」

体育系の熱血系で名前がいかにも松岡みたいな人が怒鳴る。

そんな怒鳴らなくても聞こえてるよ。うるさいなあ…誰かガツンと
いってやれ！

「うっせえんだよ！糞がつ！風呂場でおぼれろ！」

シイイイイン…

「…」

「返す言葉もないか猿が」

水野さんグツジョブ！激しくグツジョブ！体育系は泣き崩れてる！
ナイス！

「ねえねえここのお風呂ってどんなお風呂なの？」

「なんか湧き水らしいよ。」

「へえ〜。そりゃ楽しみだな」

「…」

「とにかくさっさと入って話そうぜ。」

「うんそうだな。とりあえず赤石。足を止める。そっちは女湯だ。」

びくつとする赤石。素で間違えていたようだ。

「あぶねえあぶねえ…危うく変態扱いされるところだった。」

(きゃああああ!!…なんで初代君がこっちにいるの!)

(へんたい!!へんたいだわ!)

(せいよくをもてあましてらっしゃるわ!)

「出てきなさい!」

ずへっ。

「…初代…見損なつたよ。」

初代は返事をしない。どつやら罪の意識はあるようだ。

「…ッ」

ん?今なんかいわなかった?ないてるのかな。

相当ショックだったな。こいつも赤石と同じ結果か…

「…ツ…ツ！イッ！」

体をかなり揺らして相当反省して…と思ったが明らかに様子がおかしい。

小刻みにすごく揺れ強くなったり弱くなったり。

これって…痙攣じゃねえか！

「おい！初代！大丈夫か！おい！赤石！先生呼んで来い！」

「なんで…って初代か！だからさっきから黙ってたのか！体調悪いなら先言えよ！」

赤石は廊下をかけていく。

「初代！大丈夫かお前！」

「…ッ！アツイッ…！アツイアツイアツイアツイアツイアツイアツイアツイ
アイツイ…」

ガツクリと首を落としていた。

「しよ、初代！おい！しっかりしろよ！」

「…はっ！」

「初代…」

「…ごめん」

痙攣がとまり目が覚めた初代。まだ顔は青ざめている。

「…なにかトラウマになるようなことがあったのか？」

「…トラウマって言うのかな…今は佐藤君意外誰もいない？」

静かな事務室。この感じだと誰もいないだろう。

「ああ。誰もいねえ。」

「…じゃあ話すよ。僕がなぜドラゴンになるのかが。」

暗い月明かりが差し込む中。

長い昔話が始まった。

第十二話「痙攣の意味〜あれ？シリアス展開？」（後書き）

シリアルになればいいなあ・・・

そう思う。自分はこつこつという話は苦手だなあ・・・

もっとなんかエロかったりふざけたり・・・おっと誰か着たようだ。

第十三話「生きた意味」(前書き)

前回のあらすじ

なぜかシリアス展開になった。
なんで？

第十三話「生きた意味」

「…悪いけど一つだけ先に聞かせてくれ」

「どうしたの？佐藤君？」

せつかくの雰囲気壊すようで悪いが一つ聞きたいことがあった。

そしてオレは思っていることを口から出した。

「お前は何で急に話そうと思ったんだい？」

「え？だってあらかじめ決めてたことだし…」

…分かってない。こいつはまるで分かってない。

いいか！こういう深刻な秘密をいうシーンはもっと後にするべきなんだぞ！

ちよつと前にばれてそのときにはいえないといって今暴露って言うのは

あまりにも急展開すぎる。

「なあ。この小説もしかして打ち切られるのか？」

「そんな不幸な質問しないでよ！怖いよ！」

オレも怖いんだよ！

「とにかく、僕に何があつたかを話すよ。」

「ああ。分かった。」

まずはこの小説を読んでいる皆様に分かりやすくいうとこの世界はあなたの世界とは別の世界なのだ。

世界は分かりやすく三つの大陸に区切られたのだ。

一つは平和な大陸。一つは争いの大陸。一つは…なんか意味の分からない大陸。

そして俺たちは平和な大陸に住んでいるのだ。

「はつきり言おう。僕は【争いの大陸】からやってきたんだ。」

「！！！！ お、おい！それってばかな俺でも言えることだが大犯罪だぞ！？」

そう。二つの大陸は認められた事以外の国交は全て禁止されているのだ。

人を殺したことがなくても軍隊じゃなくても来てはならないとなっ

ている。

これは常識レベルのことである。

「安心して。一応だけど許可はもらってるんだ。」

「一応ってなんだよ!?!お前!」

「とにかく僕がなんでドラゴンになれるのか、一応とはどういふ意味かは、そこはまだ詳しくはいえない。」

「まあでも…簡単に言つと改造手術をうけたんだ。」

「え?どうして?」

「だから詳しく言えないっていつてるじゃない。」

「俺は人の話を利かないことに定評があるのだから仕方がない。」

「そこで僕達は全員で逃亡を決行した。」

「…」

「おい！いたぞ！あそこだ！おええ！」

暗闇の中月明かりに照らされて影が動いている。

手を強くたたいた様な音がした後、

地面に点のような影が高速で移動した後、別の影にあたって

あたった影は崩れ、影が飛び散った。

「…ッ」

声にならないうめきをあげてその影は動かなくなった。

僕達は逃げた。下水道まで逃げた。

仲間の一人が言った。ここまできたら流石に追ってこれないだろう。

たぶんそう言おうとしたんだと思う。

僕には「ここまで」しか聞き取れなかった。

何回も拍手が響いた。

また走る。僕は走る。

なぜ当たらなかったかは分からない。本当に運だと思つ。

ある程度走ったところで、すごい勢いで流れる熱湯の水流があった。そこで道は途切れていた。

仲間の一人は迷わずに飛び込んだ。

口だけあけて沈んでいった。息のもれる音が聞こえた。

多分裏返った声だったのだろう。

仲間の一人は追っ手に立ち向かった。

蚊のように拍手の音にぱったりと倒れた。

僕は怖気づいた。後ろに下がった。

熱湯に落ちた。硫黄のにおいが僕を包む。

でも全身は熱さに包まれなかった。

下にたまたま死体があったのだ。

僕はそれをまるで船のようにして流れていた。

「そして気づいたら第一大陸についてたんだ。」

「…」

啞然とした。そんな奇跡ありえるのか？

おかしい。信じられなかった。

でもこのおびえよう…よほど熱湯がトラウマになってるってことは
本当なんだろうな。

「よかったじゃねえか…生きたんなら。」

こっちで楽しくやれば…いいじゃないか…なあ？」

「いやだよ。何で僕だけ楽しくやらなきゃいけないんだ！
死んだ人のことを思ったらどうしようもなくなるんだ！」

悪いな初代。俺はかなり腹が立った。

「お前…それでいいのかわよ？」

くづく

第十三話「生きた意味」(後書き)

シリアスかけない！かきづらい！

第十四話 「僕の意味って何？」 (前書き)

前回のあらすじ

入った瞬間に死ぬ熱湯って最低何度くらいなんだろう？

100度は絶対死ぬだろう…？

90も同じだろうから70くらいなのかなあ？

誰か教えて欲しいなあ…

そう密かに思う佐藤だった。

いっておくけど前書きだけは絶対にふざける！それだけはいわせろ！

第十四話 「僕の意味って何？」

「それでいってどういこと…!」

目がとてもらんだ形の初代。はじめて見たよ。

「僕の生き方が間違ってるって言うの!? 死んだ人のことを思って何が悪いの!？」

その人の分まで楽しみって言うの? そもそもきつと彼らは楽しむことを知らない!

僕だけ知ったそんな秘密のことをどうして僕だけがすごさなきやいけないんだ!

ものすごく日本語がめちゃくちゃになりながら、すごい剣幕で怒る初代。

「それが摂理なんだよ! たぶん!」

「それを力説できる佐藤君はバカなんじゃないのか!？」

そんな過酷な状況を生きたことないからそんなことを言えるんだよ!」

俺はどうしても許せないことがあるのだよ。

それはな? ネガティブな思想を持ちながら他人を全否定する奴のことだああ!!!

「てめえ！いい加減に…」何をうるさくしてるんだあつああああ！
「！」

扉が開け放たれた。

そこには咲野と赤石がやってきたのだった。

「お前！初代は倒れてたんだぞ！」

「いきなり怒鳴るなんて！外道にもほどがあるよ佐藤君！」

え？何この理不尽？ものすごく腹が立つぞ？あ？

「おめえらハアぬd3ぐえ位fジエ1kr gしふお p w dんえぐう
い f h ん x c o b v ! ! ! ! !」

俺はいつたい何を叫んでいるのだろう。

自分でも分からない。

とにかく怒りがあつた。

そんな大きく怒ることではなかったかもしれない。

けれどもなぜか異常に腹が立ったのだ。

その時。

ドゴォ！

俺の左ほほが動いた。

チャーチャーチャチャチャ - みたいなファンファーレが耳奥に流れながら

俺は初代の顔を見た。

顔面に水をぶっ掛けられたような顔だった。

ああ、俺は殴られたんだな。

そのことが分かった瞬間俺はぶっ倒れた。

「ちょ！佐藤大丈夫！？」

「大丈夫か佐藤！傷は浅いぞ！」

初代はささやいた。

小さい声なのだがとても響き

今まで聞いたことのないような声で。

「僕の意味って何」

時計が九時を告げた。

つづく

第十四話「僕の意味って何？」（後書き）

今回は短め。

この話は元から短めと決めておいたのさ！

次は気分一新アウトドア編さ

第十五話「花咲く森の道でのアウトドア」(前書き)

あらすじ

初代のパンチ力はそこそこ強かった。
俺のまだ抜けていない乳歯が抜けたというのは内緒！

第十五話「花咲く森の道でのアウトドア」

近代的な超巨大ホテルから離れたところ。

そこには神秘的な森の広がる自然があった。

「うおお…これは感動するな」

「綺麗…」

自分はそんな自然とかを見ないけれどこれはマジで感動する。

「とりあえずうー！山をのぼってえ！山の台所にいくぞお！」

体育系マジ黙れ！お前の熱気で台無しなんだよ！

「~~~~~」

「水野：お前は何でバリバリに音楽を聴いているんだ？」

「もう水野は仕方がないんだよ。」

「~~~~~ くまさんに〜であった〜」

せめて選曲はしっかりしようぜ？

なんかロックでも聴いてるかと思ったけど逆にシニールだなおい…

「…」

そして初代よ…

お前は何故黙りこくっているんだ…

「赤石…どうすりゃいいんだよ…」

「んなこといったってなあ…一発ギャグでもすればいいんじゃないのか？」

「そんなことしたら即死でドラゴンの力で粉碎させられるよ。」

「あ、熊だ。」

「本当だ、熊だ。」

「熊だ熊だ。」

本当だ。熊だ。

へえ…山に熊っているんだあ…わぁ…すぐ威嚇して攻撃を一段階
下げて

爪を振り下ろして、それが俺の頭をかすめて、俺の前髪が安定して、

「…思い出がよみがえるよ…うふふ…」

「うおおお！？大丈夫か佐藤！」

「大丈夫！これで今度の頭髪検査は合格だ！やったね！」

「混乱するんじゃない！落ち着くんだ！」

混乱じゃない！攻撃と知能が下がってるんだ！

冷静に考えればこの状況を打開できるはずだ！

「皆！死んだフリだ！」

「ネタが古いいいいいいいいいい！！！！！！」

「ボタン！キューー！」

これで完璧だ。口でも言ったし、大声で全員に連絡をまわした。

これにより俺はかなりの安全を…なんだか急に曇ってきたなあ…

「っつおっつう！」

大きな足が天から降ってきた。あぶねえ！

だがここからが俺の反撃なんだ！行くぜ皆俺の姿！みとけ！

「総員非難してください！」

「ちょ！せつかくバトルモードはいったのに！？皆！カンバアアア
アク！」

「…佐藤君…」

「っおお！初代どうした！」

じりじりと熊が近づいている。

簡単に言つと俺たちだけが逃げ遅れたのだ。

「宝玉を貸してくれないかな…」

「貸す！貸す！二個貸す！」

「二個も持ってないでしょ…よし。しかと受け継いだよ。」

カチリッ

相変わらず人の体で聞こえてはいけない音を鳴らす初代。

ゴウウ！つと風が吹きまわりの石が飛び杉が揺れてものすごい量の花粉が飛び散る。

「バカ！？今GW前なんだぞ！？なんでそんな大技をやるんだ！」

「はあああああ！！竜の力を手にするときだあああ！」

「それは中二病というのですよ^^」

（：ファイヤー　ンブレム）
てーってーってーってーってーってーってー

熊 VS 初代

1
1 1

1 1 1 1 1

1 1

ATK 6 DEF 3 ATK 12 DEF 7

初代の攻撃！
必殺の一撃！

熊

.....

熊に36ダメージをあたえた
熊をたおした

初代は20のけいけんちをえた

「陛下…お許しを…」

熊ってしゃべれたっけ？

ていうかどうしてファイヤー　ンブレム形式なんだよ！

「そりゃ最近作者がファイヤー　ンブレムをやりたいって思ってるからじゃない？」

「あいつは実況プレイに影響されすぎなんだよ…」

「先生まってー！何とか逃げ切れたからまってー！」

急いでダッシュで戻ると

そこではお葬式が開かれていた。

「佐藤…無茶しやがって…」

「俺たちの生存をあきらめんなよ!?!?」

う
う
く

第十五話「花咲く森の道でのアウトドア」(後書き)

I p o d かつてテンションがあがってます。W a r s です。

一応I p o d に僕ドラ。を入れて

携帯して今後の展開を考えてます。

まるで痛い人だね！

第十六話「カレーに何入れるって？勿論パスタさ！」（前書き）

あらすじ

相手の3%の必殺ほどよく起きることはない。
そしてこちらの10%の必殺ほど起きないものはない。

第十六話「カレーに何入れるって？勿論パスタさ！」

「台所に着いたぞ…死んだ佐藤のためにもおいしいカレーを作ろうじゃないか…」

「生きてますよ先生！僕は生きてます！」

「知っている。ジョークだ。」

「ジョークで人の命に関するものを言う先生を見たのはあなたが初めてです！」

まあ別にいいけどね…俺は挫けないからな。

台所と呼ばれているこの場所は

機械などはまるでなく自然の素材のみで作られたものだった。

新鮮なイメージがわくなあ…普段はめちゃくちゃステンレスっぽいのにねえ…

「カレーライスかあ…俺作ったことないんだよなあ…」

「私も料理は苦手なんだよねえ…」

「私はカレーを作ったことがない。」

赤石、咲野、水野はどうやらカレーに対する知識がないようだ。

「僕は一応作ったことあるけどねえ…」

初代はできるのか…

「佐藤君はどうなの？」

「一昨日作った。」

「よし！全部佐藤にまかせよう！」

…まあ別にいいですけど、かなりなれてるからな…

「できたー」

「おおー」

いつもと同じ感じで作ったが…そんなにもいいものだろうか…

「…！…！うめえ！すっ！すっ！うめえ！」

「佐藤って料理できたんだ…知らなかったよ…」

「なかなかうまくできたじゃない。」

「自慢じゃないが結構よく作ってるからな…」

よし…それじゃできたことだし先生を呼ぶか…

「先生できましたー！」

「ごおう！」

おっと急に火力が強まった。

ちよっと避けるか…

ドン！ベチャツ！（隣のチームのカレーが服についた音）

「うおう！」

バツ（腕を引つ込める音）

ゴン（引つ込める勢いが強くて自分のチームのなべに当たる）

バツチャー（カレーが勢いよくこぼれる）

「…佐藤…俺は地面にカレーを盛り付けると入ってないぞ…」

「先生！誤解なんです！これは事故なんです！」

「お前らの飯は抜きだな……」

そ…そんな…殺生な…

「今から一つ作戦を決行します。」

「なんだよ急に改まって…」

初代の提案。いったいなんだろう。

「山に登って食材をとります。」

却下だ！

つづく

第十六話「カレーに何入れるって？勿論パスタさ！」（後書き）

最近短くなってきたなあ…

自分では長く書いているつもりなのに…

次回からパートわかれますー

第十七話「東〜マッシュルーム〜」 (前書き)

前回のあらすじ

カレーがこぼれると山に登ることになるんだ！

皆！気をつけたほうがいいよ！

俺は初代にぼこぼこにされたからな！

第十七話「東々マッシュルーム」

どうも。皆さん。初代です。

いつもは佐藤君視点のこの小説を読んでいただき

誠にありがとうございます。

実はというとさっき佐藤君のミスでせつかく作った佐藤君のカレーを

ぶちまけてしまったんです。

ここまではよかったんです。なんせ自分の作品ですからね。

別に僕達に何の損害もなかったと思うんですよ。

そしたら先生が全員連帯責任で断食っていうんですよ。

僕は腹が立ちました。

こういう風に僕は理不尽な目に会うのが嫌いなので

ここは思い切って逆らうことにしました。

そのための作戦で皆で山へ登り食材をとってきます。

勿論、勝手に山に登るのは禁止されています。

でもそんなものは無視です。

「僕は理不尽が嫌いなんだあああ！！」

「うるさいよ初代。」

「あ、口に出てた。ごめん…」

で、僕たちは山の東側を登ることにしました。

佐藤君と咲野さんと赤石君は皆で西側を歩いています。

僕のペアは水野さんです。

なにやら折りいった話があるそうです。

「で、水野さん。折りいった話ってのは？」

「ああ、ちよつと大切な話なんだが…」

「まあまだ早いからゆっくり話そうや。」

相変わらずマイペースだ。こういうところは僕も見習いたい。

水野さんは草を見つけました。

「ほら見るよ初代。綺麗な草だろ…」

「そうですね水野さん。」

「毒草なんだぜ？これで。」

「えっ」

「もう…動かないんだぜ…」

「草はもともと動かないです水野さん。」

水野さんはキノコを見つけました。

「ほら見るよ初代。綺麗なキノコだろ…」

「キノコも動かないしこれは確か毒がない奴ですよ。」

「いいや！これは猛毒だね！十中八九で毒だぜ！」

ええ…えのきに毒があるって力説されてもねえ…

流石の僕でも分かるっていうのに…

「ほら見てくださいよ。（モグモグ）これが毒だなんてそんなわけねえだろえ！？」

「キャラが崩壊してるわよ初代君。」

「崩壊なんてしてるわいけいおうおうおう！」

「だめだこいつ早く何とかしないと…」

ふふふ…なにをいつてるのだろうみずのさんはいっらい。

べるにぼくはあたまがおかしくなっているはくえはない。

「とりあえず視点は変えさせてもらっわ。」

「なひいゝそれはずるい！」

こいつは完全に狂ってやがる…大丈夫なのか…？

とりあえずこのえのきみたいなのは危険なのか…？

よし、これは捨てよう。危ないしね。

「みずのおもたべてえ〜」

「ハッ！しまった！お前ももってたのふぁ（ゴボツゴクン）」

しまった…急に押し込まれたから飲み込んでしまった。

どうなるんだ…どうなるんだ…

体のあちこちを確認する。よかった。身体に異常は見られなかった。

「なんだおへいきあじゃないか…」

二人の酔っ払ったような男女はフラフラと山道を歩いていったのであった。

つづく

第十七話「東々マッシュルーム」 (後書き)

うおおおおお!!!

必殺四話連続投稿切り!

第十八話「西くたけやぶやけた」 (前書き)

前回のあらすじ

なんか東のほうはカオスになってる気がした。
どうなんだろ…俺は見えないからわかんねえけど…

第十八話「西くたけやぶやけた」

どうもっ！いつもは佐藤視点のこの小説を読んでくれてありがとう。

本日は出番の少ない俺、赤石視点だそうだ。

ぶっちゃけ緊張している。

だって初視点がこんな山の中だぜ？緊張するに決まってるだろ…

「私はまだ視点を担当したことがないんだけど？」

「お前はまだ出番があるだろう。」

咲野に一応突っ込んでおく。うるさいなあ。

だって見てみるよ…こんな山の中。

コンクリートジャングルでいつも過ごしている俺たちにとっては

とても心を揺り動かす物なんだよ…

さらに俺視点でとても緊張するんだよ…

「お前らはさっきから視点、視点って裏側みたいな説明をしてんじやねえよ！」

佐藤の怒鳴り声がさわやかな森に響く。そんな怒らなくても…

「いやーしかし…じゃがいもとかはあったけれど…」

「おーいこつちにんじん生えてるぞー」

「なんで山に生えてるんだよ…」

「森の入り口に書いてあったけどここを昔畑として使っていた奴がいたらしい。」

「その影響じゃない？」

生態系を壊しているな。よろしくない…

「つーが大分奥まで来たけど帰れるの？」

うん。俺も気になってたところだ。佐藤はどう考えてるのだろうか？

「…I don't have any plans」

「…Kill you!」

「わあああごめええん！俺が悪かったあ！
で、でも赤石！お前は道覚えてるだろ！？」

「I don't memorys」

「…haveを忘れてるぞ?」

英語は苦手なんだよ…

「てか佐藤も人の事を言えないでしょ。なんでplanの話になるのよ。」

覚えていません って言わなきゃいけないじゃない。」

「そ、そうか…」

二人の話していることが全く理解できない。

「ま、迷った…完全に迷ったわよこれ…」

「俺はここで朽ち果てて死ぬ。」

二人はもう駄弁っている。だらしない。

あきらめんなよ…なんとかなるって…

「もういっそのことこの森全部が無くなっちまえば早いのになあ…」

「いえてるよな…」

うむ。その意見には俺も賛成だった。

その時だった。佐藤のポケットが一瞬緑色に輝いた。

「ん？何か光らなかつたか？」

俺がそういい終わる刹那。

シュボツ！

「は？」「へ？」「はい？」

ポオウツ！

火種があがった。

なんだ火種じゃねえか…そう脅かせるな…すぐに消化すれば何も怖くない…

「消化するものがねえ！」

「うわあああ！広がってきたあ！逃げろお！」

有名な回文が思い浮かんだ。

「たけやぶやけた」だ。

第十八話「西うたけやぶやけた」 (後書き)

ホームページの準備してたら

一日過ぎてた。WOW

第十九話「山一ツ火達磨じゃねえかあ！」（前書き）

前回のあらすじ

山「もっと……熱くなれよおおおお……！」

第十九話「山一つ火達磨じゃねえかあ！」

うおおおおおおおおおおおおおお！！！！！

久しぶりに俺視点に戻った！よかったあ！

何で走ってるかって？それはなああああ！！

「後ろから炎の壁が迫ってるからだよ馬鹿野郎！！！」

小説を読んでる皆様方に分かるのかなあ…この今の状況！

芝生がいつぱいで風が結構吹いてるからすぐ燃え移るんだ…とって
も怖い。

「佐藤！初代！水野！赤石！咲野！どこへいったあ！」

「せんせええええ！！！！ここです！」

「おおつ！佐藤！そこにいたのか…つてお前後ろの炎の壁はなんだ
あ！」

「なんか山歩いていたら急に発火したんですよ！」

「そんなばかな！」

「うへへへーやまがもえてるよみずのさぁん」

「ほんとだねえ…しょだいくん…」

「おめえらは何をしてるんだ！危ないぞ！」

「ははは…はっ！？山が燃えてる！？」

「…！！なんでっ！？（ダツ）」

「おい！水野どこへ行ってるんだ！」

先生が呼び止めるのも聞かずにものすごい勢いでこっちにやってくる水野。

いったい何のようだろうか。

「あなたにお願いがあるの！」

急なお願いをされる。

「はい？何でしょうか…この状況で。」

「私は水龍だからこんな炎は簡単に消せる。けれど今近くには先生やクラスメイトがいる。だから私は消すことができない。」

「まあそうだろ。それで？」

「あなたにこの炎が消えることを心から願って欲しい。」

「…どういうことだ？」

「いいから言われたとおりによね。さもなくばお前の頭を吹き飛ばす。」

「炎よとまれっ！」

そりゃ全力で祈るさ。怖いもん。

一瞬風がぶわつと吹いた。

そしてそれにあわせるかのようにピタッという効果音が似合う感じに炎が全て消えた。

157

「…消えた…」

「よし…ありがとうね佐藤君。」

「…なんで？」

その後燃えた山の後始末は消防署とかがやってくれた。

さらにその後先生にめっちゃくちゃ怒られた後、

僕達はカレーを食べた。

他の班の余った奴を食べさしてもらった。

おいしかった。

「いいか！帰るまでが合宿だぞ！」

ありがちなセリフがすっかりはげた山に響く。

つづく

第十九話「山一ツ火達磨じゃねえかあ！」（後書き）

ふくつうがすごい

なんかいもといれにいつてるよ

第二十話「家に帰るまでが合宿」(前書き)

あらすじ

カレーは二日目がおいしいのだ。
ちなみに作者は福神漬とかはつけない派なのさ！
そしてらっきよがきらいなんだ！

第二十話「家に帰るまでが合宿」

オリエンテーション合宿が終わった。

とはいうものの名言によりまだバスの中だから

終わってはいないのだろうけどな…

俺たちにとっては終わったのも同然だ。

このオリエンテーション合宿はいろいろなことがあった。

佐藤の過去を教えてもらったし、

いろんな体験もした。

四月からこんなスタートが切れたのはよかったんじゃないのかな。

これは五月からが楽しみだな…

「佐藤君。この合宿最後にどうしても伝えたいことがあるんだ。」

「それと似たようなニュアンスの言葉をこの合宿中に何回聞いたの
だろうか。」

「うぐっ…、それほつといってくれない？」

「で、なんだよ。」

また初代の顔がとてもまじめになる。

「あの宝玉のことなんだけど。」

「ん。あれがどうかしたのか。」

「まだ佐藤君には効果をいってなかったからね。」

「…効果？」

確か咲野は運動能力を上げるやつだったけ。

「実はというと宝玉を拾った瞬間にその人が一番望んでいるものが能力として

手に入るんだ。」

「ほう。」

咲野は陸上部だったな。きつと走ってる途中で拾ったのかな。

「で、佐藤君は拾った瞬間に何を願ってたと思う？」

「自分の真相真意か…わかるわけないな。」

自分でも回答が哲学的な気がした。でも実際自分の望むことってなんだったんだろ。

「【何事もどうにかなって欲しい】ってことを一番願ってたらしい。」

普段からどんな生活してたかを一瞬聞きたくなったよ。」

心のSOSなのかな。

「でもこの宝玉を拾ったからには僕はついていかなければいけない。そうでもしなければ僕は僕自身をコントロールはできない。」

「…あれ？いつのまにシリアスになったの？」

「だから僕は君についていくよ。もし君が危機に陥ったのなら僕が助ける。」

君は僕の近くにいてくれればいい。だからお願い。」

「…まあ別にいいけど。」

特に断る理由なんてないしなあ…

それに俺は今回の合宿でわかった。

俺はこいつともう友達になったんだ。

咲野とも、水野とも、赤石とも。

「よかった！いってくれて！」

それなら友達としてついていってやるべきだろう。

そっちのほう楽しいしな。

「ちなみにその宝玉の能力は確認するけど」

【今一番願っていることを発生させる】という能力だよ。
手段は選ばないからめちゃくちゃな手段をとることもあるから気をつけてね。

それともってると運が無くなるから。」

願いをかなえられるのはうれしいけど運が無くなるのはいやだ。

と、言うより願いをかなえるつってもちよっと前の山家事みたいな方法なんだろう？

明らかにデメリットだよ。

「投げ捨てていいか？この宝玉」

「肌身離さず持っててください。」

ぐふう。

「それと佐藤君。僕分かったよ。」

「ん？」

「僕は今を楽しむよ。彼ら、彼女らの分まで。」

「…そうかよ。じゃあ思い出作りなら俺も手伝ってやるよ。」

そういつと初代は万年の笑みで

「うん！」

そう答えた。

五月が訪れた。

つづく

第二十話「家に帰るまでが合宿」(後書き)

長いんだが短いんだかよく分からないオリ合宿編が終わりました。

次は体育大会編がやってきます！

ちよつと構想を練りながらなので遅れますが…

ばんばん書いていきたいです！

そして見てくれる人も5000PVとかなり増えてきました！

本当にありがたいことです！

今後も頑張つて書いていきたいと思えます。

目指せ！一万PV！

第二十一話「黄金銃×黄金週」（前書き）

桜は完全に舞いちっていた。丁度いい暖かさと若干吹く風が鯉のぼりをなびかせていた。

そう。今はゴールデンウィーク。五日間という短く、充実した休みだ。

俺はそんなゴールデンウィークの間は

「…お母さんなにやってんの？」

「封筒張りよ。暇なときにできるからやってみたの。」

「どこの昭和時代だよ」

内職を手伝っていた。

これはそんな内職ウィークの間にあつた話。

第二十一話「黄金銃×黄金週」

「ぼく、は、こんな、せかいは、ゆるせないと、おもって、います…っ」と

適当に作文を書いている俺は佐藤祐樹さとうゆうきという。

ゴールデンウィークには一個だけ宿題がでる。それは平和についての作文だ。

なんかかなり大切な物らしいんだけどそんなものは無視して俺は駄々草にした。

皆は真似しちゃだめだよ！Warsはこういうのはものすごくまじめにやってるよ！

「とにかく、じんるいが、びょうどんに、なって、ほしい、です、ぼくのうちの、おかあさんは、ないしょく、や、やきんを、するほじ、

いそがしく、かじもすべて、ぼくが、やっています、

おとうさんは、かていのつじつで、ふるさとで、しごとをしています、

なのでとてもぼくは、たいへん、です」

あれ…目から汗が…

まあいいや。自分の思ったことを率直に書いておこう。

さて宿題も終わったところで…今日もゲームをするか。

ポケンをしようポケンを。4Vのストラクを狙わなければな…

ピンポン

チャイムが鳴り響いた。

こんな時間に珍しい。いったい誰だろう。

ガチャ

「やあ初代。なんで来たんだ？そして赤石お前はなぜ扉の後ろに隠れているんだ」

「なんで全部分かるの佐藤君…」

「そりゃだって気っぱいのがでてるしねえ…」

「出てるわけないじゃん！」

「佐藤よ！分かっているのなら話がはやい！宿題を手伝ってくれ！」

「悪いが俺は固体値厳選で忙しい！」

「どうせ厨パ使ってんならどうだっていいだろ！」

「いいから話を聞いて！」

人の家の前でなんでこんな話をしなけりゃいけないんだよ…

居間ではソファに初代。キッチンに俺。

母の使っているエプロンを着ながら俺はチャーハンを作った。

そして皿に置いて、フライパンを片付けていた。

そのチャーハンを食べながら赤石が話をしていた。

「もう一人転校生が来るみたいなんだ。」

「へー…そんな情報をどこで（もぐもぐ）手に入れたんだ？」

「お前は俺のチャーハンを食ってんじゃねえよ」

俺は赤石からチャーハンを奪い取った。

チャーハンを取られたのは悔しいが、転校生が来るのはちょっと疑問に思う。

「どんな奴が来るんだ？」

「わぁ！半袖半ズボンのせいで裸エプロンに見える！」

「初代：見損なつたよ俺は…」

男が裸エプロンって気持ち悪いだろ！馬鹿！

「こ、公園に今いるからあってみれば？」

どもりながら華麗にスルーされてしまったが、

そっか公園にいるのか…

「よし公園に行こう！」

「そうだな！ごちそうさま！」

チャーハンを完全に食い終わった赤石をフライパンでぶん殴ってから
俺たちは家をでた。

171

公園に行くとそこには赤い髪の長髪の人がいた。

透き通った目にりりしい顔つき、やわらかそうな頬。

女の子なのかな？すっごく美人だ。

思い切ってフラグを立てようと努力するか。

「…えっと…もしかして、君が今度入ってくる転校生？」

「ああそうだ。俺は 炎野四代えんのしだい という。よろしく頼む。」

…男かあ… 一瞬フラグ立てようか頑張って努力したのに。

「うん。彼が四代君。赤石君のパートナーになるドラゴンだよ。」

「…ハア？」

何？またドラゴン増えるの？出番の調整大丈夫なのかよ？

「まず第一に赤石。お前宝玉もってんのかよ…」

「ゴールドンウィーク前の登校日の日にもらった。俺はもう能力を
使えるようになった。そして大体の事情も初代に聞いた。

おもしろそうだからな。俺も何か協力できることがあったらする
ってことで。」

なるほど。優しい奴だ。

「能力は何なの？」

「まだ秘密さ」

なるほど。うざい奴だ。

「さて、それでは約束どおり、勝負をしてもらうぞ。」

「ああ分かつてる四代。」

…ドラゴンと人間が決闘するう!?

「おい赤石!」

「どうした佐藤。」

「お前、いつからそんなに心の悩みを持った!」

「何かとんでもない間違いをしているぞ…!」

「じゃあ何でそんな自殺行為!」

「一般人がこんなことに首突っ込んでいいとおもってんのか?

お前は実力がある。だけど俺はない。だから四代に勝って証明させる。」

「……」

こいつは強い決心をしている。そいつを折る訳にはいかないでおこ
う。

「それでは明日の勝負を心待ちにしている。」

そういつて四代は歩いて帰っていった。

「で、赤石。お前は何か勝算があるのか？」

「ふふふ、あの7つ道具を使うときがきたのさ。」

7つ道具？と初代が首をかしげていたが俺には分かる。

あの道具のことだ。

「…ついに使うかあれを…」

「ああ使っぜ…へへへ」

「へへへ…」

初代がオロオロしている。なんなんだろうな。

市民体育館。ここ集合で、勝負が行われる。

「んじゃやるか！四代」と自信満々の赤石。

「お願いします。」と謙虚な四代。

どっちがかってもおかしくない…

「いくぜえ！」

戦いはじまった。

第二十一話「黄金銃×黄金週」(後書き)

お久しぶり！そしてグッバイ！

第二十二話「ビッグ市民共有体育館の決闘」(前書き)

前回のあらすじ

ゴールデンウィークの宿題の終わっていない
赤石と、性別が男か女かいまだはっきりしない
四代のバトルが始まった。

第二十二話「ビッグ市民共有体育館の決闘」

いや、タイトルは某最終物語の五番目の神BGMとは関係ないのですよ。

お互いにらみ合いでいっこうに始まらない決闘。

ゴールデンウィークの微妙な暑さが共有体育館にある。

俺が窓を開けようと階段を上った瞬間…

初代が欠伸をした瞬間…

「おりゃあああああああ！！！！」

「来るかつ！！」

パソコン！テニスボールが打ち込まれた。かなりの速さ。

伊達に期待されてはいなかった！

サツつと後ろに回避する四代。

しかしその瞬間。ボールからプシュウウ！と音がし、

あたりが煙幕で包まれた。

「な、なんだ!?!」四代の困惑の音が聞こえる。

「うわぁ…初手で目くらましかよ…」

「ふふふ! 煙幕玉だつ!
スモッグボール

相手を何するかはまだ分からない! 汚くてもこの方法を使っしかない!」

…赤石が頭脳戦をしている…意外だ…

「そしてこの弾!
スプレッドボール分散玉!

いろんな方向に飛び散ったボール! いくぞお!」

パコーン! ボン! 三方向に飛び散ったボールが煙の中に入っていく。

「通るかっ!?!」

キキキキン! 日常では聞こえそうにない鉄の音が響いた。

「なっ…!?!」

煙が晴れたとき、そこには不気味な刀を持った四代がやってきた。

「おっおい!?! 本格的に銃刀法違反じゃないか!?!」

赤石の腑抜けた声が響く。

「俺の武器は三節刀。百八十度を自由自在に切り刻む刀だあ！」
ものすごい勢いで突進が始まった。

ついに動いた四代にびっくりしたのか赤石は、

「ぎゃあああああああ！殺される！」

逃げている。だめだこりゃ。

足は速いのでそう簡単に追いつかれそうにない。

「…逃げながらボール落としてるし最悪じゃねえか…」

普通のテニスボールより少し小さいボールがそこらじゅうに落ちている。

これは武器がなくなつてまずいんじゃないのか？

「ちっ…ちげえよ！わざとだよ！」

「は？わざと？」

「こつするんだよ！」

後ろを突然振り返るとまた玉を打ち込む。

パン！と分散して小さい玉にひとつひとつヒット。

その瞬間。その小さい玉はすごい速さで飛んでいった。

そして異常なバウンドをした。一発、四代の頬に当たったが

かなり痛そうだった。

「どうだあ！跳躍玉！
バウンドボール

このボールには特殊なゴムできている！すっごくはねるよ！」

「…フンッ！」

ズバツズバツ！玉は全部斬られてしまった。

「…今思ったんだが赤石の武器ってただうっとおしいだけじゃないのか。」

「…うん。そう思うのがあってる。」

「うるさい！俺にはまだ玉があるんだよ！」

煙幕、分散、跳躍　ときたら…次は何が来るんだ？

「…うおりゃあああ！砂塵玉！
デザートボール

よけられてベシヤツ

砂が出ただけだった。

「うおりやあああ！水流玉！」
ウォーターボール

よけられてベシヤツ　　水が出ただけだった。

「赤石。お前の勇士は忘れない…！」

「うわあああ！！まだ死にたくない！！！」

追いつかれた赤石。四代はマジで殺しにかかっている。

「う…うわああああ！！！」

玉をまだ打つ赤石。しかし外れてしまった。

なんと壁に刺さっていた。これが相手に刺されればよかったのに…

「死ねえ！」

赤石が刀で切られると思った刹那。

赤石の姿が消えた。

「「「は？」「」」

三人全員で八モったが…

「俺はこっちだ馬鹿めが！」

いつの間にかボールにつかまっている赤石。

手には風揚げに使うもち手みたいな奴があった。

「フックボール取手玉だ！後ろはとった！」

パコーン！ガッ！

背中に当たった音が響いた。

第二十二話「ビッグ市民共有体育館の決闘」(後書き)

ごめん遅くなったぜ

第二十三話「建築偽装はいかんぞ」（前書き）

前回のあらすじ

「この七つ道具！なんと通販で売っていたのさ！」

「赤石…ふざけるな」

「はいごめんなさい。自分で頑張って作りました」

第二十三話「建築偽装はいかんぞ」

背中にパコーンと当たった瞬間、時が止まったような感じがした。

赤石はガッツポーズをとっている。うぜえ。

というわけでここで赤石をどん底に突き落とすか。

仕方ないので俺は敵蘇生魔法を唱える…!!

「やったか!？」

「うわああ!てめえ!なんてこといいやがる!」

「え?え?え?な、なにが?」

「『やったか』って言うのは相手が復活するって言う小説のお約束を言ったのさ。」

「…」

いつの間にか四代が立ち上がっていた。

目には涙を浮かべていた。

かわいい。

「許さない…絶対に許さない！」

カチツ　　つとはめ込む音がする。

…まさかドラゴン変化かつ!?

「赤石!逃げろお!死ぬぞ!?!」

「えっ!?!どういうこと?」

アングヤアアアアアアアアアアアアアアアアア!

轟音が体育館に響く。鼓膜が破れるほどの音。

全員が耳をふさぎその場にしゃがむ。

「ぐおわああああ!?!何て音なんだ!うるさい!」

「殺してやる!炎龍のプレスを受けてみる!」

「プレス…!?!プレスってまずくないか!?!」

「ちょ…四代君!プレスは使っちゃだめだよ!」

「炎龍のプレスって…炎って事だよな!?!」

「う、うん！」

「それだけはやらせねえ！」

俺は宝玉に願いをこめた！こめた願いは！

ばぎい！ぐしゃあ！ものすごい勢いで四代の足元が崩れていった。

「そう！四代のブレスを阻止させる

ってやりすぎだ馬鹿！宝玉の馬鹿！」

やっぱり宝玉は使わないほうがいい。そう誓った。

「わああああ！！落ちる！！！」

いつの間にかドラゴンから人間に戻っていた四代。

宝玉は耳から取れていたようだ。

「四代いいいい……！」

何を思ったのか赤石が穴に飛び込んでいった。

「石をキャッチ！」

穴の中で石をキャッチしその瞬間叫ぶ！

「俺の能力！『空を飛ぶ能力』！」

…えっとそれチート能力じゃね？

空を飛んで四代の手をつかんで引き上げる。

「あ…ありがとう」

「まったく…なんでドラゴンなんかになったんだ。」

「悪い…何も考えていなかった。」

どうやら俺のせいで陥没したことには気づいていないようだ。

よかった…

「これで俺を認めてくれるな。」

「ああ。認める。よろしく頼む。」

どうやら友情が芽生えたみたいだった。よかった。

時計はもう四時を指していた。

GWももう終るような気がしてきた。

「そっぴや赤石。二つ聞きたいことがある。」

「ん？なんだよ？」

「なんで空を飛ぶ能力を欲したんだ？」

「いや：四月三十日と五月一日を間違えてて：学校遅れる感じになって：空を飛んで行けたらすぐつくのにと思っていたらこんな能力を手に入れてしまった。」

「お前は馬鹿だ。」

「はは：仕方ないじゃないか」

乾いた笑い。笑ってられるお前がすごいよ。

「二つ目。GWの宿題は終わったのか？」

第二十三話「建築偽装はいかんぞ」(後書き)

しばらく小説とまるかもー。

ごめんなさいねー。

第二十四話「もしもボールが四角だったら」 (前書き)

前回のあらすじ

現在のメンバーの確認してみる。

イケメンなドラゴンになれる謎の青年 - 竜野 初代

そんな初代にヤンデレな - 咲野 莉子

咲野の相棒？自由気ままなギャル - 水野 二代

俺の幼馴染の中でのバカ - 赤石 彰浩

赤石と友情の芽生えたシヨタっぱい - 炎野 四代

俺。 - 佐藤 祐樹

こんな特色があるやつら。

こんな団体が次に望む行事は

球技大会なのでした！。

第二十四話「もしもボールが四角だったら」

「ドゴオ！ってなつてとつてもいたそうだよね！」

「お前のその妄想はどこから来るんだ。」

赤石を適当にあしらいながら俺は教室に入った。

今日は全然眠くないぜ。昨日は九時に寝たからな。

そして赤石の方は

「ふう…んじゃ俺は今から寝るかな」

「ご愁傷様です。」

今から就寝時間だそうです。

「え…皆さん。いよいよ球技大会が」「ヨッシャアアアア！」

「！」

…はじまります。」

そつなのだ。前書きで書いたとおり、球技大会が迫っている。

我が校の球技大会は以外に大きい物で、

クラス単位で参加して

サッカー、野球、バスケ、バレーのうち、どれか二つと
全員強制参加のドッチボール。これらをやる物だ。

「え〜それでは…今からどれに出るかを決めてください。」

学級代表の【エキストラ】君が司会を進行してる中、

俺らはそれをガン無視して相談をする事にした。

「野球とサッカーがよくな？」

「ええー…でも私バレーやってみたいんですけどお」

「水野。そんな無理なことを言うんじゃない。」

「なんで?」

「理由は簡単。作者が描写できないからだよ。」

「だって経験のあるサッカーの描写しようと野球の描写しようと
どうせ三流なんだから…いいじゃない」

「「ら!そこ!話をしっかりききなさい!」

クラスに一人はいそうななんか中途半端な女子。

「【エキストラ】さん…ちょっとくらいいいじゃないか。」

「【エキストラ】ってなによ！」

私には【エキストラ】って名前があるのよ！」

「合ってるじゃないか。」

【エキストラ】さんは泣きそうになっている。

「わっ…【エキストラ】さん大丈夫!？」

「もうそれ以上【エキストラ】って呼ぶなあ！」

【エキストラ】さんはキレて本格的に泣いていた。

「今後、名前を考えるのが面倒な人は皆【エキストラ】って名前になるんだっけ…かわいそうに」

「同情するなら名前をくれ！」

【エキストラ】にやる名前はねえ。

話し合いの結果。野球とサッカーに決定した。

理由？描写しやすいからだよ。

「そういえば皆、野球経験は？」

ちなみに俺はそこそこある。

「ううむ…ルールは知ってるんだが…」

「やったことないなあ…」

「私は女子だし」

「~~~~」

「少しなら…」

ううむ…どうやら戦力は微妙のようだ。

「【エキストラ】の皆さんは？」

「」「」「ああ…あるともお」「」「」「」

や、やばい。口でオーラが出てる感じのする擬音語を

言っちゃってるよ…これは殺されるのでは…

「もうひとつ皆、サッカー経験は？」

野球を聞いたのなら、サッカーも聞いておこつ。

ちなみに俺はそんなにない。

心からそう思った。

つづけ

第二十四話「もしもボールが四角だったら」 (後書き)

「ーるでんつーくがにげていくっ

第二十五話「僕ドラ座席ポケット10」(前書き)

前回のあらすじ

【エキストラ】さんと【エキストラ】さんと

【エキストラ】くんは怒らせてはいけない。

第二十五話「僕ドラ座席ポケット10」

「んじゃ野球の練習からはじめるか!」

「キャッチボールAからはじめよう!」

「赤石。そのネタはとあるラジオを聞いた人しか分からないよ。」

「自由な!未来を「カットオ!」

畜生!なんでこんな今回ぎりぎりなネタが多いんだ!

そんなこんなで球技大会のための練習をすることにした。

うちのクラスはサッカーはまだいいとして野球の経験者が少なすぎる。

ならここで野球の経験をあげておくべきだと思つのでやることになった。

【エキストラ】君の意見だ。

「で?どんな練習をするの?」

咲野が俺に聞いてくる。体操服姿の咲野はとてもかわいかった。

「キャッチボールとかバッティングとかじゃね?」

水野はズボンを微妙に下げている。顔はいいからとてもかわいい。

こんなかわいい人が二人に慕われて俺は練習内容を決めるのか…

神様！これからも毎日拝もう！

そしてこんなことがまた起きるようにもっと拝もう！

それじゃ俺は遠慮なく練習内容を決めさせてもらおうよ！

「神様に拝もう！」

間違えたよ。畜生。神様のバカ。

「えー、野球には攻撃、守備、走塁の3つが主に大切となっているもんだ。

だから、それぞれトスバッティングとロングティー、キャッチボールとノック、ベースランニング。これらを分けてやるろう。」

結果的に初代が決めた。この野郎…俺の立場がないじゃないか！

まあここではちょっと本格的に作者が野球部アピールをするか。

トスバッティングという物は簡単に説明すると、

ピッチャーに対してボールをワンバウンドさせて返すという練習だ。

確かバットコントロールをあげるための練習だ。

さて俺たちの練習風景はと…

「赤石 角材 ホームラン！」バガツキャアン！

パスト 「…ライトフライだぞ赤石。」

「炎野！後ろ下がりがりすぎ！下がりがりすぎ！」

「咲野！あんたの番だよ！」

「ふえ！？わ、私！？私…打てるかな…」

「打てる！あんた宝玉の効果を忘れたの！？」

「で、でも…私…自信がないわ！」

ブウン！ガキーン！

「じょうがい…ほーむらん…だと…」

うん！予想通り練習目的完全無視だ！

できればそれはロングティーでやってほしかったよ！

そして次はキャッチボール。

これは相手の胸の前に投げれば良いね。

基本中の基本。

さて俺たちの練習風景はと…

「おりゃああ！赤石ボール！」

バスツ 「…ボールだぞ赤石。」

「咲野早くなげて！」

「ふえ！？え…えいつ！」

ズゴオオオオ バゴオ！

「いったい！俺に当てるな！練習風景を見ている俺に！」

畜生。覚えとけよ。

次はベースランニング。ベースを走ればいいんだが…

「ぬおおおおお…！」

「…！…！」

「すっすっはっはっ…！」

「シェイハシェイハシェイハ！」

うん。大丈夫そうだな！これ。

あれ？そういえば初代がないな？どこいったんだろ？

「初代君、ハーフパンツ忘れたみたいだよ。」

「なんだそのありがちなくだらないミスは。」

咲野がなぜそれを知っているかは聞いちゃいけないのかな。

「だから私たちが渡した奴着てくれば良いのに……」

「何を渡したんだ？」

「スカート」

「おい、腐女子」

「うつさい、デフォルトネーム」

お互いが心にクロスカウンターした感じがした。

第二十五話「僕ドラ座席ポケット10」(後書き)

タイトルの元ネタは聞いちゃだめ！

第二十六話「ケガ率5%ですぐ折れる〜恐怖の野球少年〜」(前書き)

前回のあらすじ

タイトルあぶない

第二十六話「ケガ率5%ですぐ折れる〜恐怖の野球少年〜」

「んじゃノックいくぞ〜!」

俺の掛け声がグラウンドに響く。

とりあえず俺はノッカーとしてノックをすることに。

「ほいつ!」

カキン!ぽろっ。

野球未経験者が多いこのクラスでは、攻撃、走塁は何とかなるにしろ

守備がまずい。

カキン!ぽろっ。

それに経験している人でも動き方はとても大変だ。

カキン!ぽろっ。

こうやってノックをしてもまずは基本技術を養わないとね。

カキン!ぽろっ。

「全員エラーかよおい!」

「難しいもんだ…」

「無理ね。取れる気しないわ…」

「Can't」

「…もう少しだった…」

ううむ…思った以上に下手だぞ皆さん方…

これは俺が手本を見せてやるしかないな…！

「【エキストラ】君！ノックお願い！」

「だから【エキストラ】っていうなー！」

【エキストラ】君にノッカーを代わってもらい、

今度は俺が受けてやることにした。

「ボールをとるときは腰を出るだけ落として、あまりグローブを寝かせずとるとやりやすいよ。」

片手で取るのも良いけど両手でも良いかもしれない。」

「へえー佐藤って以外に詳しいのね」

咲野が声をかけてくる。純粹にこれはうれしい！

（ここで俺がナイスキャッチをすれば咲野が俺に好意を持つかもしれん！）

「佐藤、顔、顔。」

赤石になんか言われたけど気にしない！

フラグのために！佐藤！行きます！

カキン！来た！

「でえりやあああああ！！」

俺のスタートダッシュを切ったのは一塁！

そして玉が飛んでいったのは二塁ベース！

「【エキストラ】め…俺のフラグをへし折りやがって…」

どれだけ人の幸せを憎むのだろうか。あいつめが…

「佐藤君。やっぱり全員でノック練習をしたほうが良いかもしれないね。」

「ああ…そうしよう。」

「千本ノックだあああ！！」

「うおおおおお！！」

【エキストラ】君の声が響いている。

俺たちは全員でノックを試してみることにした。

皆、すつこくぼろぼろ落としている。

そして俺もポロツポロだった。

畜生がああああああ！！！俺の野球経験！なぜ生かせない！

「佐藤、野球経験あるつつつてたけどそんなうまくないな」

赤石が鼻をならしながらいう。正直めちやくちや腹が立った。

「とるんじゃごりゃあああ！！！！」

パシィ！ショートバウンドを難なくキャッチ！

「ほらみたことかあ！」

こついった感じで全員の補給率はどんどん上がっていった。

これなら結構上の順位狙えるんじゃないかな…

そう思ってちよつとぼーっとしていると

「うお！ミスった！」

剛速球のライナーが休んでいる咲野の頭に一直線に飛んでいって

る！

「咲野、危ない！」

俺は全力で咲野のほうに走っていった。

「…はっ!？」

咲野のほうも気づいたみたいだけどあれはもう間に合わない！

「間に合えええええええええええ!!！」

俺のダイビングキャッチ！

ボールに当たった感触はあった！取れたか!？

グローブを見てみると、そこにはしっかりと白球があった。

「よかった…」

「…」(ドキドキ)

ドキドキしている咲野かわいい… ハッ!

「よかった怪我なくて…んじゃ！練習再開しようか！」

よし！気を取り直して俺もとるぞー！

カキン！

パスッ！

ポロッ！

まあそうなるんですけどね。

第二十六話「ケガ率5%ですぐ折れる〜恐怖の野球少年〜」(後書き)

最近投稿送れて本当にごめんなさい！

ちよつと私生活で忙しかつたです！

ごめんなさい！

明日から元に戻ると思うので！多分！

んじゃ！

第二十七話「交錯する思い」 (前書き)

前回のあらすじ

ちよつと経験があるからって調子に乗るのはよくない。

第二十七話「交錯する思い」

「おーい！早くノックうつてくれ！」

「おま！どっちの方角に打ってるんだ！」

「ピッチャー！しっかり入れろよー！」

日照りの中、中学生たちは男女混合で野球をしている。

そう。日照りの中なのだ。だから。

「暑い…」

「本当に暑いよね〜（パタパタ）」

男、女ともども暑さでへばっていた。

うん… 俺的にはうれしいのだが女子が服をもって

パタパタするのはよくないと思うんだ。

「もっと羞恥心を持って欲しいなげふう！腹にローキック！」

くっそ…最近口に出す癖がついている！

「まっ…休憩にするかな…」

咲野は呆れた声で提案した。

「よーし！練習再開するぞ！」

俺たちは意気揚々と日陰から飛び出た。

「いやだね」

しかしそれは制止されてしまった。何故？

「俺たち出番が全然無いのにこれ以上疲れたくないからね。」

そういったのは【エキストラ】達だった。

まったくこういうときに妬みは腹が立つ。

「まあまあ、活躍すればきっと名前がいつかもらえるって！」

「いつかじゃだめなんだよ！」

説得失敗した。畜生。

「こうなりや今から練習試合をしようじゃねえか！」

なんかきゆうに【エキストラ】達が提案してきた。

何で？【エキストラ】のくせになまいきだ。

「佐藤達のほうには三人エキストラをくれてやる。

俺たちは【エキストラ】全員。

9vs9だから文句は無いだろう?」

公平といえば公平だ。これはもう引き受けておくか。

「いいだろう! 相手をしてやろう!」

俺は声高らかに宣言してやった。

「いいの? 佐藤?」

「いいんだよ。八つ当たりといえど、練習してくれるんだから。

それに紅白戦はいい実践練習になっていいよ。」

まあ何事もポジティブに捕らえていこう!

「よーしいくぞあー!」

俺たちの後攻で試合は始まった。

ピッチャーは俺。なんとなくだ。

「いくぞー!」

シュツ! そこそそ速い球!

これなら打たれないかな…

「日ごろの恨みいいいいいいいい…！」

グワツキイイイイイン！！！！

轟音が響いた。

佐藤 0 - 1 【エキストラ】

第二十七話「交錯する思い」 (後書き)

ちょっと短くなってしまいました…

明日もかけたら書きます！

第二十八話「佐藤っぴっぴってる！HEY！ハイ！へい！」（前書き）

前回のあらすじ

初代たちは球技大会の練習に勤しんでいた。

そんな時、「やってられるか！」という声とともに

【エキストラ】たちが謀反を起こし、徳川幕府の誕生です。

ちなみに初代は少し前に保健室からハーフパンツを借りました。

第二十八話「佐藤っぴっぴってる！HEY！ハイ！ハイ！」

「のおおおおおりゃああああ！！！」

グワキイイイン！！！！

「ふああこおん！ぱあああん！！！」

グワキイイイン！！！！

「ひいてえんうすたあいいるう！！！」

グワキイイイン！！！！

「S M A A A A A A A A S H！！！」

グワキイイイン！！！！

「ざああわあああるううどおお！！！」

グワキイイイン！！！！

「さて今何回「グワキイイイン！！！」といったでしょう！」

「六回！」

「赤石残念！答えは五回だ！」

「くそっ…ケアレスミスだ…」

「ばーかばーか」

「うっせえやい！」

ハッハッハッハッハ…

俺たちの笑いが乾いたグラウンドに響く。

「笑い事で済めばいいんだけどな。」

「な。」

一文字で返答した赤石の目はわずかに潤んでいた。

そしてノーアウト満塁。これはいつたいどうゆうことかね^^

「いくZO！」

カキン！と打った球はサード強襲！

サードは初代。捕れるのか？

「…ミエタ！」

ぱしっ！初代のグローブにボールが見事に入る。

さらにサードベースを踏みながら捕ったからダブルプレーである。

「……！！初代！ファーストに！水野に全力投球だ！」

「えっ！えっ！？わ、わかった！」

シュツ！球が投げられる。

「しまった！フライだからバックしなければ。」

初心者が一番初めにやらかすミス。それはフライでの

バックに失敗することである。作者もよくしでかす。

「Go To Heaven」

「アウトォ！」

塁審の人が会つとをつげる。

水野以外に上手いなおい……

「やったよ！佐藤君！トリプルプレーだよ！」

「ああナイスプレーだ！初代。」

次は俺たちの攻撃の番だ。

相手のピッチャーの球速を試してみよう。

シュツズバン！

「うん。あれだ。こいつはソフトボールマウンドで
投げさせる奴じゃない。」

今大会はソフトボールマウンドを使っているのだが

キャッチの音と投げる音が同時に聞こえるということは相当早い。

おそらく130km/hぐらいなんじゃないのか…？

かといってこれは俺でもうてないんじゃないのかな…

「うおっ！打ち上げちまった！」

赤石。まさかお前ライトにライナーを運ぶとは…

「…！…！」

ライトのダイビングキャッチ。

「くっ…敵ながらナイスプレーだよ。」

ジェラシーはリミッターを破壊する。

「…あぁ…」

初代が今までに無いような声を出しながらバットを振る。
しかし一球目は空振り。

「くそっ…絶対次は当てるぞお…」

「無理だな。イケメンには俺のボールは打てない。」
むちゃくちゃな理論である。

「おらぁ！」

「だまれえ！」

ガキイイイン！！！！

初代は見事に右中間にボールをぶち込んだ！

「僕は！僕は！イケメンなんかじゃないんだああ！！！」

「初代！セリフがおかしい！そのセリフは喧嘩を
売ってると思えないよ！」

そしてこの後の打席は

水野は

「 See You 」

カキイン！とレフト前に運ぶ。

咲野は

「えっ！？こんなの！？う、うてない！」

カキイイイン！とレフト前に運ぶ。

そして打順は俺。

現在満塁。前の打順のエキストラがからぶったので。

ツーアウト満塁。ここで点を返さなければ漢ではない！

「お前らにいつておく！」

ズバン！ストライク！

「俺はここで主人公としての威厳をだす！」

ズバン！ストライクツー！

「俺は！ホームランを打つ！」

ズバン！バッターアウトチェンジ！

俺は声高らかに宣言をした！

さあいくぞお！

「お前は死ぬ。いつぺん死ぬ。」

「佐藤君。ちょっと倉庫の裏いこうか。」

「まあまあ皆。俺を鉄棒にくくりつけたら誰がピッチャーをやるんだ？」

「…」

「いたあい！無言で左肘にローキック！」

「…」

「ま！まつんだ【エキストラ】三名！俺を食べてもおいしくは無い！」

「【エキストラ】と呼んだことにより俺の怒りが有頂天になった！」

むう…この状態をどうやって切り抜ければ…

そつだ！名案を思いついたぞ！

「わかったじゃあ名前をあげるよ！」

その一言が世界を揺るがした。

第二十八話「佐藤っぴっぴってる！HEY！ハイ！ハイ！」（後書き）

10000PVいったよ！わあい！

七月七日の話「七夕」（前書き）

皆さん方。本日が何の日か知ってるかい？

そう今日は、7月7にt…

ん？今違う？ 文章打ってる日が7月7日だからいいんだよ！

今日は7月7日。年に一度。星に願いを託す、

【七夕】という行事がある日なのでした。

七月七日の話「七夕」

「やれやれ…皆集まったみたいだな。」

「「おー」」

夜7時くらい。俺たち六人組は今、俺、佐藤の部屋に集合していた。

「で？いったい何をしようって話？サバイバル？」

突拍子も無い意見を言うのは赤石。昔っからのバカである。

「今日は七月七日だから…七夕をやるんだ！」

少しうれしそうなのは初代。こいつはわけありでドラゴンになったりする

なんかすごい奴だ。

「へえー。佐藤にしては気が利くわね。」

いつ見てもお美しいのは咲野。ふわふわとした髪の毛。やわらかそう

うな
類。「そしてキュツ、キュツ、ボンの魅惑のスタイル」

うん、流石学年一だ。

「ファルコオオオン パアアアンチ！」

「ボゴオオ！」「へブライツ！」

「ハアハア…あなた、今本音が出たわね？」

「すみませ…あつ、違っ！本音じゃないから許してえ！」

うん、流石学年一だ。（腕力が）

「」

さっきからずっとヘッドフォンを聞きながら俺の手をガムテープで固定しているのが水野。こいつも初代と同じ境遇である。

「ってうおい！ガムテープで何をする気だお前は！」

「南無三…」

そういつて俺のすねにガムテープを張る炎野。

くっ…こいつ、まるで男じゃないのになんなんだ…

さて、今俺のおかれている状況は…手を固定されてすねに…

「すねにガムテープ…まさかお前ら！やめろ！それだけは！」

すねにガムテープといったらあれである。

「一気にがしてベリリリイってなってすね毛をぬく」「ベリリリイ」

という

恒例の処刑方法で俺の脚が激痛に見舞われて俺は悲鳴をあげることになったということになるのです。

「わあああ！！いたい！！！！」

「反応おそっ…」

「説明役兼ねてるんだから仕方ないだろう！」

全く、やられるこっちの身にもなってほしい。

「今日は七夕をやるから皆に集まってもらったんだ。」

「七夕？」

七夕っていうのは織姫、彦星なんとやらというやつだ。

また検索してみると良い。

「まあとにかく皆に願い事をこの短冊に書いて、このマンションの前にある、竹に飾るぞ。」

「わあい、すごい説明調！」

ほっとけ。

「…」

男女六人が全員短冊に黙って書いている光景。少し不気味かも知れない。

「ん、書けたぜ。」

「私も。」

「僕も。」

「僕も。」

「」

どうやら皆書けたみたいだ。

「んじゃ、それぞれの願いは、竹に飾ってから皆で見合おっせ。」

「おっけー」

マンションの外にでると他の子供たちが竹に短冊をたくさん貼っていた。

「んじゃ、はろつか。」

地域の方が用意していたんだろう。そこにおいてあった紐を使い、俺たちは竹に短冊をくくりつけた。

かなうと良いな。

俺たちの願い事。

佐藤の短冊。

「母親の仕事が楽になりますように」

健全な男子中学生の願い事だとは思えない願いだ。

だが、彼らしくもあり、優しさのこもった願いだ。

赤石の短冊。

「テニスが上手になりますように」

こちらは打って変わって普通過ぎる願いだ。

だがその中の決意はとてもでかいのだと思う。

咲野の短冊。

「大きくなりますように」

何が大きくなるかは聞いてはいけない気がする。

炎野の短冊。

「もう少し学力が欲しい。」

全うな意見である。

さて。と俺は息をついた。

水野と初代の奴の短冊は見なかった。

大体内容は把握できているからだ。

だから俺は、絶対に守り遂げなければならない。

ちなみに実際にはこう書いてある。

水野の短冊。

「この環境が崩壊しませんように。」

初代の短冊。

「この笑顔が続けられるように。」

守ってみせる。

七月七日の話「七夕」(後書き)

ごめんなさいっ！

テストとか自分の心に負けて

全然更新してませんでした…

本当にごめんなさい！

きつとこの辺から直したいですね！

がんばります！

第二十九話「やっぱり宝石、ダメ絶対」(前書き)

前回のあらすじ

【エキストラ】は今年で14になるので
命名の儀を野球グラウンドですることになったが、
そこに待っていたのは悲劇だった。

「いやそんなものは無い。」

第二十九話「やっぱり宝石、ダメ絶対」

「貴様らに名前を授ける！」

俺の声が青い空の下、響き渡る。

理不尽なことに悩むのは嫌いな俺はそい言った。

さてこれで問題は

「「「ふっざけんなあああああああああ！！！！！」」」

解決してないね。

「なぜだ！なぜそいつらだけえ！」

「それだったら俺は佐藤側につく！」

「実は俺、佐藤だったんだ。」

「いいや俺が、赤石だ。」

「俺がガン ムだ！」

「ちょ、ちよつと佐藤君！この人たちなんとかして！」

「そ、そんな事言われたって、俺のせいじゃねえよ！」

「いやお前のせい意外になにがあるんだ！」

「ねえよー！」

「じゃあ合ってるじゃあないか！」

くそっ！開き直っても状況は変わらない！

「んじゃこいつしよつぜ？」

向こう側の【エキストラ】のキャプテン的な奴が口を開く。

「この試合で勝ったら俺らと名前を交換する。それでどうだ？
佐藤君？」

…何を言い出すんだこいつは！

「名前を交換するだ！？

お前は俺みたいな名前が欲しいっていつのか！？
俺みたいな運命を背負うぞ！」

これで考えを改めるはず…

「それでもいい！俺はキャラが欲しいんだ！」

こいつ…できる…！！

「いいかお前ら！絶対にこの試合は負けられないぞ！
名前を死守するんだ！そして今いるエキストラは
名前が貰える！だから頑張ってくれ！」

「『ウオオオオオオ！』」

全員すごい気迫だ。これなら相手チームを打ち倒せるかもしれない。

「ナマエナマエナマエナマエ…」

「オマエノナマエヲヨコセエ！ヨコセエ！」

「フフフ…ワタシハ咲野…咲野莉子ヨオオオ！！」

「コロシテデモウバイトル…」

「コロスコロスコロスコロス…」

全員すごい気迫だ。これなら俺のチームを消し飛ばすかもしれない。

「いっけえ！【エキストラ】！」

スポーツ刈の男はそういわれて少し不機嫌そうだ…むう…名前…

「いっけえ！【刈田俊哉】！」

「…！」

グワツキイイン！！

なんとホームラン打球。一点が入って点を返した。

「うおおおお…！！俺は！俺は！名前を！得たぞおお…！！
うおおおおおおおお…！！」

そういつてヘルメットを投げ捨て、ブレイクダンスをしていた。
すこいね。

ちなみに名前は「スポーツ【刈】り」と

こいつは足が速いから【俊】を使ったっというわけだ。

「いつけえ！【エキストラ】！」

長髪めがねの女子。結構美人な顔はしているのにこうなるのは可哀
想だ。

名前を考えるのは難しい…

「…！！【明色彩】！！」

「みえたあっ！」

まるで女の子とは思えない声で吠えた後、ホームランをすっ飛ばし
た。

「来たわ！私の時代がついに来たわ！」

そういつてヘルメットを投げ捨て、ブレイクダンスをしていた。

髪が痛むぞ。

ちなみに名前の由来は【明】るい【色】。【彩】色。となっている。

まあ彼女をあらわすのには妥当だろう…

「気のせいかしら…私より名前がいい気がする。」

「正統派メインヒロインだから仕方が無い。」

(そんなことないよ、気にするな)

「ほう。どうやらそちは私に殺されたいようだな。」

だからいやなんだ。

「いつけえ！【エキストラ】！」

根暗な男子はそういわれていた。

特に嫌がるそぶりも見せずただ淡々とバットを振るっていた。

暗い…でもきつと輝く部分はあるんだよ…どんな人にだって…

「電流走る…！【星夜春光】！」

「フルメタル ジャケット！」

すぎまじい轟音と共にボールはプールに入った。

文句なしのホームランだ！

「こいよベネットオ！銃を捨ててかかってこい！」

そういつてヘルメットを投げ捨て、ブレイクダンスをしていた。

由来はもういうまでもない。

「なあこいつらのほうが俺らより名前がましな気がするぞ？」

「気のせいだよ。」

赤石をなだめる俺。

現在の得点は12VS12。

試合時間はもう3時間。ぶっちゃけもう夕方になってしまっ

「なあもう終わりに……」

「するわけねえだろおええ！」

むっ……こうなってしまうと困る。

ぶっちゃけもう疲れがたまっ

て死にそうなのだよ。

…使うか？宝玉。

そう思ったときにすでに宝玉は光っていた。

…もう遅かったみたいだな。

さて、災害が起きなきゃいいんだが…

そう思っていた時、頭が水に叩かれた。

「…雨だ…」

あれ…普通だ。

普通だな…平和だな…、でもなんだかいやな予感が…

「お、おい！雨降ってきたから終ろう…」

「するわけねえだろおええ！」

てかそんなことを行っている場合じゃない！

まずい！絶対なんか起きる！

そう思った刹那。

俺は泣きたくなかった。

それは明らかに宝玉のせいだ、

それで

土砂崩れが起きたことを。

第二十九話「やっぱり宝石、ダメ絶対」(後書き)

久しぶりに書くぜっ！

更新遅れててごめん！

ここから復活マイレボリユーション！

第三十話「話が全く変わるのも野球ゲームではよくありがち」（前書き）

佐藤「Wars? お前は何かいうことがあるな?」

Wars「はい…本当にごめんなさい…」

赤石「このバカ! ちゃんとやらないからそうなるんだ!」

Wars「うるさい! 俺はちゃんと学校の宿題を全部終らせたんだぞ!」

咲野「両立できなきゃ意味ないわよ。」

Wars「うぐっ…」

初代「そもそもWarsさんは二二 動画で昔見た実況プレイを最初から全部見てたじゃないか!」

Wars「それは言わないで…」

二代「こいつ殺そうぜ?」

Wars「やめて! 今日からちゃんと書くから! 本当にごめん!」

四代「もうだめタイムアップだ。」

Wars「ぎゃああああ!!」

Wars「ハッ…夢か…前回のあらすじを…前回ってどんな話だった?」

サクタン「おいしい!」

ホーエー「まじかなぐり捨てんぞ!」

前回のあらすじ

この小説を書いているとき、大雨が降ってきて雨が吹き込んでパソコンがぬれた。

第三十話「話が全く変わるのも野球ゲームではよくありがち」

「うおおおお！！大土砂災害だ！！何か何日も時間が経った気もするけど大災害だ！」

「逃げる！とにかく高台へ！高台へ逃げるんだ！」

生徒たちは大混乱になっていた。

それもそのはずだ。もともと高いところにあるところにある学校なのだが、

その高いところよりさらに高い山が後ろにある。それ故に土砂崩れの被害は甚大ではない。

「くっ！」

俺はとりあえず皆流されてるから俺は急いでトランクス一丁になる。

そして自分のズボンの先を縛る。

こうすることによりズボンは浮き輪の様な役割になる。

「ちょ！佐藤！お前危ないから戻れっ！」

赤石が俺を止めにかかる。

「だめだ！これは俺の宝玉のせいでこうなったんだ！何とかして頑張ってみせる！」

「日本語がめちゃくちゃだぞ！」

「うるせえ！いつてくる！」

「あ！おい佐藤！」

とりあえず一番初めに近くにいるやつから…

そう考えていると四代が近くで泳いでいた。

「四代！大丈夫か！？」

「…水泳は得意な方だから。しかし初代と咲野が大変なこと…」

「水野は！？水野はどうなってるんだ！？」

「水野は大丈夫。えら呼吸できるから。」

新事実。

「ええ！？あいつエラ呼吸できるの！？」

「え…？あ…うん。」

「じゃああいつ陸上はどうしてんの！？水陸両用なの？」

「陸上のときは肺だけ…」

「…人魚だったのかあいつ…」

もっと敬わないといけないな…

「と、とりあえず陸地に向かって泳いでいつてくれ！」

「分かった…」

これで四代は大丈夫だ。

「あとは初代はどこだ！？」

「ここだよ！佐藤君！」

そういつて自ら顔だけ出している。そして自分の腕で咲野を持ち上げている。

そしてその佐藤の腕は咲野の腰の下の部分に当たっていた。

「……」

「わぁ！ゴフツ！佐藤…ゴフツ！佐藤君！無言で水をかけない…ゲフツ！」

「ちよつと佐藤！何してんのよ！」

「咲野さん！どいてそいつ殺せない！」

「殺さなくていいのよ！」

まったくこいつらは…絶対出来てしまっているな…

「どうする！？二人とも泳げるか！？」

「佐藤君も無茶するね。トランクスだけでここまで泳いでくるなんて…」

「バカ野郎。俺のせいでこうなっちまったんだから…責任を取らないといけないんだよ。」

「…死んだらどうしよもないでしょ！？」

「そんなこと言われたって…」

全うな意見だとは思う。今思うと僕はバカじゃないのかな…

「うわああああ！助けてくれえええ！」

そう思った時、少し先の方に【エキストラ】たちが濁流に流されていた。

「まずい！あいつらを助けないと！」

「大丈夫！水野がさつきそつちに向かったわ！」

「え！？あのエラ呼吸ができる人魚の！？」

「…いやドラゴンになった時よ？」

なあんだ…ドラゴンだったか…つまり水野はいまドラゴンになって
皆を救って…

「うおい！皆がいるのにドラゴンになっていいの！？」

「死んだらどうしようもない！」

そういった初代の目は必死だった。

しかし水野はいまどこにいるんだろうか…

そう思った瞬間。

足元が暗くなった。

「ん？」

そう思った瞬間、急に足がついた。

「へ？」

「水野さんが着てくれたみたいだ！」

そして地面が盛り上がってきた。

ザバアッ！

そして俺たちはドラゴンの背中にのっていた。

「うおおおお！！！水野！」
『待たせたぜ 私の未来』

相変わらずイヤホンを装着しているのは変わりないようだ。
水にぬれて壊れないのかな？

『私は 皆を 助ける 皆の 待つ場所』

そういつて【エキストラ】のほうへ泳いでいく。

「【エキストラ】！助けに来たぞ！」

「わああ！同級生がドラゴンにのってきたあああ！！！」

「おかあああああああん！」

皆気絶した。

「…ま、まあそっちのほうが都合いいしね！」

「そ、そうだね！」

「…確かにそうだ。」

「いつの間に水野の背中に乗ったんだ四代は。」

「さっきからずっと。」

「そうか…」

さて現在の状況をまとめると、

いま水野がドラゴン化しており、

その背中に、俺、初代、咲野、四代が乗っている。

そして。

ガシャガシャガシャグワアアアアアン！

「土石流だ！」

「水野！切り抜ける！」

『M U R I 』

土石流が前方から来てしまった。

これは…俺の勘が告げる。間違いなくやばいと！

「四代君！行くしかないよ！」

「分かった…！！」

カチリッ！

いつの間にか俺の手から奪い取っていた宝玉を耳にはめる。

ゴオオオオウ！

今、ここに三匹のドラゴンが土石流をとめにかかった。

『『『うおおおおおおお！』』』

ガガガガガアッ！

「とまったね。」

「ああそうだ。」

雨は上がった。

土石流はとまった。

全ては収まった。

「とりあえず…皆…お疲れ様。」

「ああ。」

【エキストラ】や教員はみな気絶してしまっただけど…

とりあえず丸く…収まったかな？

職員室。一人だけ気絶せずに生き残った教師がいた。

「が…学校にドラゴンが三匹もいるぞっ！

これは報告しないと！」

そういつて警察に連絡をする教師がいた。

「はい。そうなんです！今、突如土石流がきて！

それをドラゴン三匹がとめていたんです！」

警察はあきれ声をしていた。

「まあ…一応上に知らせてはおきます。」

ガチャンと受話器は切れた。

第三十話「話が全く変わるのも野球ゲームではよくありがち」(後書き)

更新遅れてごめんなさい！

夏休みの宿題は終わりましたので！

ここからはじまる俺の小説タイム！

第三十一話「準備ほどもんどくさいものはない」(前書き)

前回のあらすじ

何日もあつた大災害に決着が着いた。

まあ実際には一日だけですけどね！

誰が何と言おうと一日だけなんだよ！

わかる！？だから！時間が掛かったわけじゃないんですよ！

分かりますかっ！？僕は無実ですよっ！？

佐藤「Warsがどれだけ痛い分かるな。」

Wars「何だよっ！」

第三十一話「準備ほどもんどくさいものはない」

あの大洪水からはや一ヶ月。

ん？一日？気にするな。これはきつと隠喩表現だよ。

国語の授業できつと習う。皆さんもしつかり勉強すると分かると思いますが、

「くのような」を使わない表現方法だ。つまりこの場合、

「あの大洪水からはや一ヶ月過ぎたようだ。」

見たいな感じなんだよ。わかるね？

「佐藤？お前国語のテスト何点だ？」

「49点。」

「おおすい。50点満点ならすいのになつ。」

畜生覚えてる。平均いつてないけどいいんだよ！平均は55だったし！

「いいから早く準備をしろっ！」

体育系のうるさい、俺の命をジョークにしたあの先生が言う。

せっかくだから名前をつけてみるか。

「【藤山雲仙】…」

「生き生きするぞおお！」

そういつた瞬間メガホンをぶん投げてそれが初代の頭にヒットし、

その【藤山】はブレイクダンスを始めた。

名前をつけた人は皆ブレイクダンスするんだな。

ここきつとテストに出るんだね。

まあとりあえず準備をすることになりました。

この大会は一応とてもでかい学校なので、準備は大変。

そして昨日？の大洪水のせいで掃除をさらにすることになった。

誰のせいだよ！俺のせいだよ！

「さて、どうしようか…」

「とりあえず班行動をして準備するのが一番いいと思う。」

さすが初代だ。しっかりとした判断をとってくれるな。

いい奴だ。

「んじゃ僕は咲野さんとで。

後、赤石君と水野さんと四代君で。

佐藤君は僕と一緒に。」

そうかー… 赤石君と水野さんと四代君がペアで…

初代と咲野さんとでペアか…

「よし。初代。そこにある鉄パイプをくれないか？ちよつと素振りをしたいんだが？」

「OK。佐藤。それは未来を簡単に予測できるな。」

「赤石はなすんだ！俺はあいつを撲滅しなければならぬっ！」

「お前！さっき初代が言った言葉を思い出してみろっ！」

思い出しても意味が無い！あいつは自分がいいように言ってるだけなんだから！

えつと…

「んじゃ僕は咲野さんとで。

後、赤石君と水野さんと四代君で。

佐藤君は僕と一緒に。」

ん？

「佐藤君は僕と一緒に。」

「ありがとう初代。お前はいいやつだ。だからお前はどこか遠くに
いってはくれないか？」

「OK。佐藤。お前はとことん欲に忠実なBOYだな。」

「赤石はなすんだ！いいじゃないか！男は皆まつすぐなんだ！」

「そのセリフはもっといいところで使うんだ！」

畜生…バカ野郎…覚えてろよ…

「んじゃハードルはこぶから、手伝って佐藤。」

「ラジャ！咲野さん！」

ふえーい！やったね！共同作業だ！やったねっ！やったやった！

めちゃくちゃうれしい！とりあえず疲れさせないようにしっかり力を

入れてがんばって（ニギッ）

「やわらかいっ！」

「あ…あんた何、手を握るのよ！」

「！？胸じゃないのか！？」

「どこをどう間違えたら胸になるの！？第一服着てるから感触は180度違うわ！」

「そうか…握るほどの胸がないか…」

「【叩き潰し・クラッシュ】！」

「あぶないっ！」

ボゴオオオオン！

なんとということでしょう。あんなに平坦だった土地に、

クレーターができました。

「さささささささささ咲野さん?!今のはアメリカンジョークで…」

「アメリカってという言葉を出すな!世界観が安定しなくなるでしょ！」

「うおおおお!?!さらっとメタ発言してますが!?!」

「うるさい!」

いやでも…本当にすべすべの手だったな…

「もう一回握っていい？」
(ごめんってばっ！)

「【微塵切り・スライス】！」

「銃刀法違反だああああああああ！！！」

そんなわけで初代がチャツチャと作業を続けてる間、

どんちゃん騒ぎをして入るところ…

面白いなあ…準備って好きな面子でやると面白くなるもんだな。

でもこんなとき決まって、「ガチャーン」とかいつて閉まっちゃうんだよね。

「ガチャーン」

「わあああああああ！！！！本当にしまっちゃったよ！どつすんだよ！」

「えっ！？佐藤君がふざけていったんじゃないの！？」

「どつすんよ佐藤！」

ええ…

どろすんのこれ…

「とりあえず先生を呼んでみるか？」

「この小さい窓を見てみてももう周りに誰もいないよ？」

「はやつ！退散はやつ！ありえん！なぜこんなにはやいだっ！」

「もうどろすんのよ！？」

「こつなったらもうぶっ壊すしかないよね？」

「初代！？何を言い出すんだ！？」

「そうよ初代君！早まっちゃダメよ！」

そつだよ！きつとこついうときは牢獄にとらわれたときのイベント
みたいに先生が…

そつして九時になりました。

「うおおおお！？なんで今回こんなに展開が速いんだっ！？おかし
くないかっ！？」

「やるしかないな…もうね。」

「初代君…もうやつちやつていいよ。」

「咲野さんっ!？」

初代も耳にはめようとしなないd……」

カチッ

ドゴーン

そして僕達は更地にたった。

ちなみにこの後、初代が一瞬にして建築しました。ドラゴンパワーってすごいね。

第三十一話「準備はどめんどくさいものはない」(後書き)

合宿から帰ってきたらそしたら俺は

小説を書くというね。

第三十二話「ボールしか友達いないっ！」（前書き）

前回のあらすじ

準備の話（前回）はWarsのお気に入りのためである
なぜならラブ要素を入れたから。
こういう三角関係っていいよねっ！

第三十二話「ボールしか友達いないっ!」

「キックオフ!」

そう言っつて赤石は黒板を蹴り飛ばし

「ぬぐおおおおお…」

痛みにもがいたクリスマススイブ。 比喩

「馬鹿丸出しだな…」

だつて考えてごらんよ? 放課後に急に黒板を蹴るという意味不明なことだな?

俺の考えは間違つてないよな?

「うるさいっ! そんな長つたらしく説明するな!」

「二行つて長いのか!??」

俺の教室風景は今日も平和だった。

そんな時、咲野がこっちを向いていることに気づいた。

すると、頬を赤らめて、下を向いた。

おおっこれはもしや?

「佐藤君！練習いこうよ！」

着替えの終わった初代が俺の後ろに立っていた。

つまり咲野は初代の着替えを見ていたということか。

「お前もう服脱ぐな。」

「えっ」

そして全員が体操服に着替えてサッカーグラウンドへと向かった。

うちのクラスはサッカー苦手…だったけ？

確かそうだったと思うので…

サッカーに置いてやはり基本はドリブルだ。

ドリブルというのはボールを蹴りながら前にすすむこと。

ここから味方へのパス、敵のゴールのシュートを打てる大事な動作だ。

「よし！佐藤君！練習しよう！」

そういつて初代はボールを取り出した。

「そうだな！」

俺もそういつてボールを取り出した。

「頑張るぜ！」

赤石もそういつてラケットを取り出した。

問・今の中で異端者を答えなさい。

「てめえだ赤石！」

俺のゴールが赤石の背中に刺さる、ばんばんばんばんばん
イシューー！

「ぐふっ…くそ…やってくれるじゃねえか佐藤オオオオ！」

赤石のシュートが足から放たれる。縦回転をするボールを放ち

「いったあい！」

初代にクリティカルヒットしていた。

すると女子のほづが騒ぎ出した。

「アラヤダ！ワタシノシヨダイサンニナンテコトヲスルノ！」

「これだからゆとりは…」
「嫉妬乙」

なんだ。このいかにも深夜時間帯に「時報っげえええ」っつてコメントをしているような女たちは…

「赤石君…覚悟は出来てるよね？」

「すまんかった。反省はしていない」

「タイガーシュート!!」

ドシューウ と音と共に

ものすごい高速のシュートは炎野の背中にヒットしていた。

「あ…」

「…」

あ、泣いてる。

「てめえ！俺の炎野になにしゃがる!!」

「初代は顔がいいからって調子乗ってんじゃないのか!？」

「俺の赤石が迷惑をかけたのなら俺を殴れ!!」

「むしろ俺に当ててくれ!!」

ホモが二人にMが一人。うちのクラスはなんなんだろう。

「いいだろうっこうなりやサッカーの練習はやめだ…!!もっどツチボールにしてやるっじゃないか!」

そういつた瞬間俺たちの戦いは始まった。

主人公はつらいよ

現在の死亡者（死んだ順）：佐藤 【エキストラ】 【エキストラ】

【エキストラ】 【エキストラ】

第三十二話「ボールしか友達いないっ！」（後書き）

うわあい Chunis内で作者の小説が人気になってるよ

がんばらねば

第三十三話「Battle/Survival」(前書き)

前回のあらすじ

主人公がいないと話はどうなるのか
俺の話はどうなるかやってみようと思っ。

第三十三話「Battle/Survival」

風は変わらず吹いていた。

地面の砂利は少し動いた。

グラウンドの片隅の草はざわついた。

どうしようもないほどうるさかった。

けたたましい音量の叫び声が響いていた。

阿鼻叫喚。そんな言葉が似合うグラウンドだった。

教師も止めに掛かるが、それもむなしくボールを投げつけられ死者になってしまった。

「あぶねえ!」

飛んでくるボールは女子へ向かっていた。

そのボールを男子は取った。

「大丈夫か【エキストラ】!」

「うん!そっちこそ大丈夫【エキストラ】!?!」

「ああ！大丈夫だ！」

会話はすぐにきられた。男は戦場へ向かう。

三対一。圧倒的不利だった。

「女子を渡せ。いい餌になる。」

「そうはいかな。」

「そうか。ならば死ね。」

ボールはいつせいに投げられた。

男を到着点として狂いなくボールは直線状を走る。

瞬時、男の体制は低くなる。

しゃがんだのだ。

空中でボールは互いがぶつかり合い、

その殺傷能力を失いボールは転がっていった。

そしてそのボールひとつひとつを拾っては

つま先へむかって投げつけていく。

敵の驚きの表情は情けないほどだった。

「大丈夫か！」

再度、男は女子を確認する。

背中に軽い感触がした。

しかし、全身に走る痛みは即死レベルだった。

「ごめんね。」

女子の手からはボールは離れ、手からまっすぐに背中に当たっていた。

「初代…さっきはよくもやってくれたな…」

赤石のつぶやきは低いものだった。

「よくやるうと思ったね？赤石君」

自信満々の初代の声。

「気にいらねえんだよ…今日のお前は…調子に乗りやがって…!!」

「それを人は僻みというんだよ…」

「どうだい？返す言葉はあるかい？」

「てめえと話す気なんてさらさらねえ…!!!!」

赤石のダツシュが始まる。

「そうかい…でも…僕は君とは戦いたくないんだ…任せたよ炎野」
「!!!」

赤石は後ろを振り返る。そこにはすでにボールが迫っていた。

「よけれな……」

「水野…あんた…まさか初代のことを」

「…久しぶりにイヤホンはずさないといけないみたいね。いいだろう。あなたを恋敵として倒すわ。」

「!!! …いいじゃないやってやるわ!」

女たちの戦いは始まっていた。

咲野は自分の宝玉の能力で、

水野はほぼ人外の能力で。

ボールはぶれるほどの速さで動いていた。

互いのボールはぶつかり合い、そしてはじけた。

「うわああああああ逃げろろおおおおお!!!」
「殺せ!全力でボールを投げろ!」

全員が初代を追っていた。

全員が初代を殺そうとしていた。

「この世界の人は醜い…」

初代はそうつぶやいた。

そして前方にも人が現れた。

「…やれやれ…どうやら僕も醜い人間のようだ。」

初代はうつむいた。全員のボールはありとあらゆる方向に投げられた。

「醜いならその分、醜く生きよう。」

その瞬間、地面で倒れていた佐藤を壁にした。

「な…なんだと…!?!」

「これでおわりさあああああああ!!」

ボールの無くなった兵士たちは皆死んでいった。

「終わった。やはりこの世界の人間は皆死んでいった。」

「いや。お前も死ぬのだ。」

「!?!」

初代にボールが当たった。

「…僕が優勝だ。」

勝者：炎野 四代

第三十三話「Battle/Survival」(後書き)

結論

主人公のせいでふざけた小説になるんだこれ。

佐藤「お前まじ調子のんじゃねえよ！」

赤石「第一そんなしつかりとした小説じゃねえ！」
文章力を身に付けないな。

佐藤「ちよつとお前こつちこい！」

Wars「おい何をする！」

赤石「ちよつと今回ギヤグがないからここでやるっぜ」

佐藤「うんうん赤石はよく分かってるよ。」

初代「とはいっても女子の皆さん方は帰っちゃったけどね…」

Wars「女子がいないなら俺は帰るぜ！」

初代「メ木几又すぞ？」

Wars「いやカッターナイフはガチで危ないからね？」

赤石「そうだ。刃物はダメだぞ。やるなら鈍器だ。」

Wars「それもだめだ」

佐藤「えーとサラダ油をばら撒いて…」

Wars「火災もだめだっつのwwww」

佐藤「とりあえずこの話はどうなっていくんだ？」

Wars「実はこの小説61話まで起承転結は出来てます。」

赤石「へー。じゃあなんで更新できてないんだ？」

Wars「ごめん。サボりなんだ。」

佐藤「えーとガソリンもばら撒いて」

Wars「危ない危ない！」

初代「そろそろ挿絵が欲しいところなんですけどそのあたりは」
Wars「もう少し待ってくれ……」

第三十四話「決意の日」(前書き)

前回のあらすじ

まじめに書きたい病が発症したWarsは
まじめにしっかりと書いてみた。するとWarsはふざけて書きた
い病が発生した。

Warsは助かるのか！緊張の第三十四話！今始まる…！

第三十四話「決意の日」

夕焼けはグラウンドを赤く染めていた。明るすぎて帰る生徒の後姿はただの黒い影になっていた。

多くの生徒が夕焼けに向かって帰っていく、その姿は一句読めるくらいだと思っ。

「夕焼けを…背に…？身を包んで…？」

ダメだ、思いつかないや。

「くそみたいな句を読む暇があるなら掃除をしろ！」

「いたっ！何すんだよ赤石！俺の芸術をバカにするのか！？」

「どこが芸術だ！」

「言っってたじゃ！偉い人が！【芸術は…】」

「【劇物だ】だろ！？」

「…赤石…」

「どうして泣いているんだよ佐藤？」

お前がまさかそこまでバカだとは思わなかったよ。

「んじゃ俺も帰るか…」

「元凶の佐藤君が帰るの？」

「うっ…」

ジト目で咲野と初代が見てくる。

そんな目で俺をみるなあ！

「分かったよ…俺もやってやるよ…」

というか咲野は帰る気無いか。

ガラス片をしつかりと校舎裏に捨ててきた。

だいぶ綺麗になったなあ。ついでに俺らの教室もかなり綺麗になった。

「綺麗になったじゃねえか」

「うお！？赤石？お前帰ったんじゃないのか？」

「いや？初代に呼ばれてな。」

初代が呼んだ？いったい何のため？

「よし、それじゃあ今ここにまた皆集まったね。」

「水野も四代も戻ってきてる！？」

「急用！」

「…ちよっと持ってくるものがあつた。」

持ってくる物？何だ？

「今から本当に深刻な話があるんだ。」

「深刻な話？」

思わずオウム返しでたずねてしまうが本当になんの話だろう。

「いい話と悪い話の2つがあるんだ。悪い話から話したほうが分かりやすいから先に言うね。」

普通そういうのは後にするべきなのにな…

「ここに僕らがいることがばれたんだ。もう一つの大陸の人に。」

「…？」

えーっと…つまり初代たちが逃げたことが敵にばれたということは

取り返しに来るから…

「全面戦争！？」

「それも十二分にありえる。とにかくそろそろ追っ手がやってくるかもしれない。」

「冗談じゃないぜ！？これ俺たちの大陸の大ピンチじゃないか！？」

「どうするのよ！？」

「どうしよもないんだ…」

どうしよういつの間にか世界を巻き込んで俺たち…

「一応いい知らせも言っておくよ。この情報を送ったのは死んだと思っていた僕の友達なんだ。」

そしてその友達が僕の武器と佐藤君の武器を持ってきてくれる。仲間も増える。

それだけしか僕たちにいい知らせはない。」

一人増えただけで国家は相手できない気がする。畜生…どうすれば…

「ちなみに水野さんたちが持ってきてくれたのは送られてきた手紙だよ。」

そんな声は僕の頭には届いていなかった。

「とにかく僕たちで何とかするしかない。」

夕暮れ時。僕らの心は何を思っていたのだろうか。

第三十四話「決意の日」(後書き)

疲れた―

第三十五話「ヒビリ」（前書き）

前回のあらすじ

プライバシーの保護に失敗した初代たちの個人情報が出てしまった。

住所、趣味、職業、性癖がばれてしまった初代はぶちぎれた。そしてドラゴンになったりした結果、国家権力に怒られた。

第三十五話「ヒトリ」

俺はビビりだ。

最低な男だ。

『国家権力が襲ってくる』

初代の言った言葉を要約するとこんな感じだ。

今は前回わやになってしまったサッカーの練習をしている。

学校の行事のため、気分はよくないが参加はしている。

浮かない気持ちを無視して空はあきれほど晴れ渡っている。

「……」

上を向いて考え事するのは皆良くやると思う。

歌にもあった気もする。涙がこぼれ落ちない様に。

涙は流れはしないけど今は上を向いていたかった。

……予感はしていた。

生まれつき勘はよかった。だからわかったことだった。

いづれ大きな事件が起こることは。

初代は俺の力を借りようとした。だが俺は断った。

正直俺は戦いたくはない。

しかし、俺の勘では俺が協力しない先の勘を一切読み取れなかった。かといって、俺が本当に協力したところでどうなるというのだろうか。

俺はどうしたいんだ？

俺はどうすればいいんだ？

「佐藤！シュートいけ！」

バシッという音とともにボールは赤石から渡された。

トラップをしようと思ったが失敗してボールは通り過ぎていった。

「おいおい！しっかりしてくれよー！」

赤石の声も通り過ぎていった。俺は…俺は…。

「ほいつー！」

ドゴォー！赤石のパンチは俺の腹部にめり込んでいた。あ、あばらが…

じ…じ…じ…

「ちょっと裏こいせ。」

…やれやれ…

体育館の裏はよほどのことが無い限り音もない。静かなエリアだ。

「てめえ…まだ気にしてんのか…？」

赤石の声は良く通っていた。

「そうかつかするなよ…」

「黙れ！どうしてだ！なぜ協力しないんだ！お前は何がしたいんだ！」

「国家権力だぞ！やめたっていいじゃないか！」

「ビビってるだけじゃねえのか！」

「…！」

赤石の声は俺につきささる。

ビビる。怖がる。逃げる。

(佐藤…早く逃げろ…)

…！…！…！

「どうしちゃまったんだよ！何があつたんだよ！」

「もう…いやなんだよ…」

「へ？」

「俺は勝ち目の無い戦いになんかでたくない！足を引つ張るだけだ！俺には力がない！初代たちは戦いに行くんだろ！それならやらせればいい！」

「あいつらには力がある！でも俺は力なんてない！足手まといになるだけだ！」

「俺は…俺のせいでお前たちが傷つくのを見たくないんだよ…」

「言ってることが矛盾してるじゃねえか！」

「しらねえよ！」

しばしの静寂が訪れる。

「どうしちゃまったんだよ…！！！」

「俺の父親…知ってるか？」

「…知ってる。片腕がなくなっちゃまってんだろ。」

「そうだ。あれは俺のせいなんだ。」

「…」

「体中に傷があるんだ。でもそれでも笑って俺の前に立ってくれる人なんだ。」

「…でももう見てられないんだよ。何の力になれない俺なんて…いるべきじゃないんだよ…」

「お前はただ逃げているだけだ！それだけじゃ何も変わりなんかしない！」

赤石の声が響いた後。

「そうですねよ。」

小さいがよく響く声が聞こえた。耳だけを通過していくだけじゃなく、脳まで震わせて。

体中から聞こえるような声だった。

「誰だ!」

「怪しいものではありません。」

「マントにマスクして怪しくないと思える奴なんてこの世にはそうそういなえ!」

「まあまあ… 私、【エレフオウン】と申します。簡単に言つとまあ【飛脚】ですか…ね?」

どういうことだ? 展開が速すぎてついていけない。

「佐藤さん。あなたにお届け物です。」

「…差出人は?」

「あなたと同じ苗字…お父様?から。」

「…!?」

父親…!? あの父親から届け物? 何だろうか。

封筒をエレフオウンは俺に渡す。

失礼かもしれないがものすごい速さで上の部分を破り捨てる。

中に入っているのは手紙だった。小さいメモ一枚。

書いてある言葉は俺の脳内に流れ込んでくるようだった。

…

「赤石。俺間違ってたよ。」

「え？」

「強くならなきゃだめだ！」

「え？え？何？急に百八十度意見変わってるん？」

「ウオオオオオオオ！がんばるぞおおおおお！！！」

「えっ、ちよっ！まってくれよお！」

「とりあえず球技大会を終らせるぞ！」

「お、おう！」

いても経ってもいられなかった。

俺たちは急いで運動場に向かった。

「さて…楽しくなりそうですね。」

コツコツ と足音が響いて、影はどこにもなくなっていた。

――力を持ちたい。だから今を強く生きたい。俺は、立ち向かいたい。

第三十五話「ヒビリ」(後書き)

活動報告にも書きましたが、

月曜日、金曜日、日曜日の定期更新を捕りたいと思っています。

まあ書けたら書きますが

第三十六話「さあ！始まるザマスファンガーV2！」（前書き）

前回のあらすじ

名前がカタカナの奴を出場。きっと強い。
エキセントリック少 ボウイでいうとカウボーイ。

第三十六話「さあ！始まるザマスフンガーV2！」

赤石との話から二年。

「違うね。」

もとい四日。そして球技大会が始まった。もしかしたら雨が降るかと思っただけどそんなことは無かったぜ！

「ほらっ！ぶざけてないではやくいくよっ！」

咲野に手を取られ引つ張られる。ん？手をとられ？

「ホオオオオオオ！！！」

「なんだ！？急に佐藤の頭がおかしくなったぞ！」

「だーかーらー！早くいくよ！」

咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。

咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。

咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。

咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。

咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。

咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。
咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。
咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。
咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。
咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。
咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。
咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。
咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。
咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。
咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。咲野が俺の手を取ってる。

「佐藤大丈夫かぁー！傷は浅いぞ！」

「咲野が俺の手を取ってる。」

「まだどうかこの糞佐藤…殺すぞ」

「すみませんでした。」

畜生…こんなひどいことをするなんて人間じゃない…

やれやれ。僕達は開会式に向かった。

開会式ってなんか無駄に疲れるよね。

校長先生の話なんてなくなればいいのに…

「今から第六十四回体育大会を始めます。」

パッパッパッパー！ファンファーレが鳴り響く。

泣きながら初代がやってきた。ん？どうしたんだろう。

「どうした？」

「一応聞き返してみる。」

「ハーフパンツ忘れちゃったんだけど…」
「またか!？」

何なんだ!？じゃあお前は今何を履いて過ごしているんだ!？

そして下の方を見ると、ひらひらと舞い上がる布のようなものがあつた。

「それでスカ「言わせねええええ！絶対にそれだけはいわせねえ！」

畜生！誰だ！こんなことをやらせたのは！

周りを見てみる…！絶対に犯人がいるはずだ！

えーと周りには…

ジュースを飲んでる四代。

音楽を聴いてる水野。

鼻血を出してぶっ倒れてる咲野。

【エキストラ】と話してる赤石。

ん。わかつたぞ。

犯人 咲野 断定

「よおーし！スタメンを発表するぞ！」

そして野球の時間がやってきた。

「一番、ライト、刈田俊哉！」

「おお、俺か。」

足が速いから妥当だろう。

「二番、セカンド、俺。」

赤石がセカンドか。確かにあってるかもな。

「三番、ファースト、【エキストラ】」

…うん。まあいいや。

「四番、サード、咲野」

「ええ！？わ、私！？無理よ！絶対無理よ！」

四番はいいとしてサードはきついかもな…まあやってみる価値はありそうだ。

「五番、ピッチャー、初代」

「よしっ！頑張るぞ！」

やけに投げてると思ったら初代ピッチャーだったのか。まあこれもいいかな。

「六番、レフト、【エキストラ】

七番、キャッチャー、【エキストラ】

八番、センター、【エキストラ】

九番、ショート、【エキストラ】

以上！一回戦悔いが残らないように頑張ってくれ！

ふむふむ。

…あれ？

「ちょっと赤石？」

「なんだ？お前がいないのは当然だ。なんとなくね。」

「…」

「涙…ふけよ…」

四代がハンカチを貸してくれた。ありがとう…

「プレイボール！」

「ええ！？何で何の脈絡もなしにはじまるの！？」

絶対読者さんが混乱してるよ!?

「三行で説明すると。」

佐藤キレる

俺殴る

そのまま試合へ」

「大体あつてる。」

さあて…流れる涙を拭きながら相手の動向をつかがうぞ。

「おおおおお!!!消える魔球!」

バン!ズバン!

…あれ?球がまじで消えてない?

第一回戦

初代チーム VS 魔球チーム

現在のメンバー

一番、ライト、刈田

二番、セカンド、赤石

三番、ファースト、【エキストラ】

四番、サード、咲野

五番、ピッチャー、初代

六番、レフト、【エキストラ】
七番、キャッチャー、【エキストラ】
八番、センター、【エキストラ】
九番、シヨート、【エキストラ】

現在の補欠

佐藤・四代

第三十六話「さあ！始まるザマスファンガーV2！」（後書き）

二話投稿したぜべいべー

現在時刻 23:24

深夜だぜっ！

次の更新は日曜日ですー！

第三十七話「鳴かぬなら 野球しようぜ ホトトギス」(前書き)

前回のあらすじ

消える魔球って大体裏があるよね！

第三十七話「鳴かぬなら 野球しようぜ ホトトギス」

「うおおおおおお!!!!」

ズバン! 「すとらーいく^^」

「ちくしょおおおお」

一番が空振り。俺たちのチームから始まった攻撃だったが

早速空振り。二番も空振り。三番も空振り。

一瞬にして一回表が終了した。

「つよすぎる…」

「消える魔球とかどうやってうつんだよ…」

「もうだめぽ…」

もうすでに敗色が見えつつある我がベンチ。

だめだなお前ら…

「お前ら! もっとがんばっていいこうぜ!」

「「「てめえ試合でねえだろ」「」」

ないてなんかいないもんっ!

しかたないので魔球の対策について必死に考える。

消えるのはバッターボックスに刺しかかった瞬間だ。

まじで見えなくなるんだよな…

そしていつの間にかキャッチャーのグラブに入る。

きつと何か細工をしてるんだろうけど…

不自然な点が一つも見当たらないんだよなあ…

仕掛けを探すようなことは出来なさそうだな…

なんとかしてあれを攻略すれば…

ん？まてよ変化球って変化する前に打てばいいんじゃない？

「それだっ！」

早速作戦を仲間に伝えることにした。

「それができたら苦労しねーよ。」

「ないてなんかいないもんっ！」

六回表。初代の好投により0-1。こっちは一切打てないけどよく

出来たものだ。

相手の一点はホームランによるものだから仕方が無い。

そして現在の状況はフォアボールによるランナーが二人。

少し荒れてるようだが結局消えてるのでなかなか打てない。

畜生どうすればいいんだ…

だから変化する前に打てればいいんだが…

…！！ その時佐藤に電流走る…！！

さてよ…このうちかたなら…！！

「審判！代打！俺！」

「プレイボール！」

「おいこら佐藤！何にもなしにいきなり代打ででるな！」

チームが騒がしいがしたこつちやいないぜ！

打ち方はもう決まってるこうすればいいんだ！

「おい見ろよ！あの佐藤の姿！」

「首を下げたぞ！」

「まるで水平線のようだ！」

「いっつびゅーていふる…！」

ふっ。まさにそうだ。今の俺の姿は

水平バランスなのだから。

水平バランスとは

足一本で体を支え、あとは手を真横に突き出し、もう一本の足は後ろに伸ばす。

T字バランスとも言っらしい。

「『バカだ！』」

何をいう。この天才的な作戦にしかくなど…

「すらーいく^^」

あ、一球投げられてた。

「もうだめだ…」

「佐藤が空振りしたら全員でケツバットな。」

「もうケツにバット押し込もうぜ。」

うわあああ！？最後の発言が一番俺にとって恐怖だよ！？

ピッチャーからボールが放たれる。

くそ…うってやる！

「すーとらーいく^^」

水平バランスだったから片手でバットだったわ。無理。

「おいしいいいい!? せめて両手で持つてくれ!」

「佐藤で試合終わったら全員でスネバットな」

「もう俺がまんできねえ…」

もうだめだ。俺はもう逃げる準備をしておこう。

ピッチャーからボールが放たれる。

えっと一本足打法みたいな感じで…こうすれば…

「ほいつ!」

グワツキイイイイイイン!!

あら、この球軽いじゃない?

「ほーむらん^^」

「やったぜえ!」

「おめでとう佐藤! ご褒美にケツにバットをさしてやろう!」

試合には勝ったが勝負には負けそうだったので俺は逃げた。

結局その後は初代がしっかり抑え、俺たちのチームが全員水平バ
ランス打法でバキャバキャ

にうつたので 65 - 1 で勝った。やったぜ。

「さあて…次の試合なんだが…」

おっ次の試合か。

「ピッチャーを四代にしてそれ以外は変更なしで！
頑張っていくぞ！」

どうして俺はここまでではぶられるのだろう。

「佐藤は無断代打で出たからだめな。」

「てめえ！誰のおかげで勝てたと思ったんだ！」

「ケツにバットをさすぞ。」

「ごめんなさい。」

さあて次の相手チームはつと…

「カこそパワー！」

「ジャスティスイズデストロイ！」

「40秒でしたくしな！」

とかなんだかいいながら素振りをしていた。

コンクリートのブロックにバットが当たったとき、

コンクリートのブロックはグシャア！つと音を立て崩れた。

次はパワー系か。

現在のメンバー

一番、ライト、刈田

二番、セカンド、赤石

三番、ファースト、【エキストラ】

四番、サード、咲野

五番、ピッチャー、四代

六番、レフト、【エキストラ】

七番、キャッチャー、【エキストラ】

八番、センター、【エキストラ】

九番、ショート、【エキストラ】

現在の補欠

佐藤・初代

第三十七話「鳴かぬなら 野球しようぜ ホトトギス」(後書き)

ごめんなさい！時計見間違えました！

第三十八話「ラウンドアウトウー！ファイッ！」（前書き）

前回のあらすじ

11時110分に前回は投稿されたからいいよね！
許されるわけが無いな。

第三十八話「ラウンドアウトウー！ファイッ！」

「のおおおおおりゃああああー！！！！」

グワキイイイイン！！！！

「ふああこおおん！ぱああああん！！！！」

グワキイイイイン！！！！

「ひいてえんうすたああいう！！！！」

グワキイイイイン！！！！

「S M A A A A A A A A A S H！！！！」

グワキイイイイン！！！！

「ざああわあああるううどおおお！！！！」

グワキイイイイン！！！！

「あれ！？すごいデジャブだ！？」

「さて！これは何話の「コピーアンドペーストでしょー」」

「わっかんねーな……」

「読者の皆さんはぜひ探してみてくださいね！」

完

ウォーズ先生の次回作にご期待ください！

「いやそれはないから。」

畜生終らせるよ。この小説ごと…

「そんなことはさせないぞっ！」

作者が会話に介入してくるほどうざいことはないと思った。

「ひどい。」

どっちが主人公で作者か分かりにくいからやめるもう！

…というわけでさっきから外野に運ばれ続け、すでに5点も取られてしまった。

これはまずいのではないのか…

「四代！今こそ練習の成果を見せてやれ！」

「…いくぞ…」

キャッチャーは赤石じゃないのになんか共闘しとるな…

練習の成果ねえ…まあ大方カーブとかスライダーとかその辺なんだからうだが…

「ナツクル！」

はい？そんな都合よくナツクルを投げれるなんて

「アウト、チェンジ！」

本当にナイスピッチングだ！

さて…俺たちの攻撃になつたわけだが…

「おりゃ…なんだこれ！？鉄球か！？」

刈田がバットを振り切れていなかった。

相当重い球を投げてるんだな…

「アウト、チェンジ！」

くっ…これはかなりピンチじゃないか？

六回表。

現在 0 - 6 で負けている。かなりピンチだ。

「くっ…大丈夫かな…」

四代は肩で息をしていた。

だいぶ疲れてるみたいだ。大丈夫なのか。

とりあえずなんとか回を乗り越えたので、俺たちの攻撃になった。

くっ…とりあえず観察はしたが目立った弱点はないな…

「佐藤、何か目立った弱点ないか？」

「んー。強いて言うなら、サイドとショートの間動きが遅いぐらいだよ。弱点なんかないよ。」

「もうそれ致命傷っていうんだよ。」

あれ？そんな重要なのかな？

俺が不思議な顔をしていると

「じゃあ俺が証明してやるよ。」

赤石が不適に笑う。やれやれそんなにすごい情報なのか？

「ほいさっ！」

カキーン！

サイドとショートの間ボールは転がった。…ぼてぼてじゃないか…

こんなボールじゃとられるんじゃないか…？

「うわあ あ~~~~ 取れない~~~~」
「抜けたぞ赤石！二塁まで走れ！」

赤石は二塁に余裕でたどり着いていた。

すごいなあ。

「いいかお前ら！あいつら左右に振ったりすればめっちゃ余裕だ！」

「サーイエッサー！」

それからというものの

まるで20mシャトルランをやらせるような勢いでボールを打っていたところ、

見事に勝利を収めました！やったね佐藤ちゃん！

「俺試合にでてねえんだけど……」

m
9

「ああ！こいつバカにしてるだろ！」

「ちなみに次の試合も佐藤は出ないぞ。」

「ウワアアアアン！死んでやる！」

さて次のチームは…

あれ？まだベンチに座ってないみたいだ？

「赤石どこにいるんだ？」

「もういるじゃん。」

あれ？それってまさか後ろを振り返ったときに着たってことか…？

「どうやら次は足が速いようだ。」

現在のメンバー

一番、ライト、刈田

二番、セカンド、赤石

三番、ファースト、【エキストラ】

四番、サード、咲野

五番、ピッチャー、初代

六番、レフト、四代

七番、キャッチャー、【エキストラ】

八番、センター、【エキストラ】

九番、シヨート、【エキストラ】

現在の補欠

佐藤・【エキストラ】

第三十八話「ラウンドアウトウー！ファイツ！」（後書き）

むうちよつと短めかもしれないぜ…

もう一話書きたいところだ…

次の更新は金曜日になるかも！

第三十九話「ラウンドスリイ！デュエツ！」（前書き）

前回のあらすじ

眠くてしかたないんだよ！俺はよ！

と言いつをしている間に三回戦までですすんだ佐藤たち（佐藤は試合にはでていない）。

いったいこのままの機動力でどこまですすんでいけるのか！

第三十九話「ラウンドスリイ！デュエツ！」

「盗塁だ！」

赤石の怒号に似た声が響く。

キャッチャーの【エキストラ】がボールをセカンドの赤石にボールを投げる。

ランナーがスライディングをした後に赤石のグラブにボールが入った。

「セーフ！」

くっ…足が速いのが恐ろしい。フォアボールなどで一人だけ出しただけでいきなり

セカンドまでにいかれてしまうからこれはきつい。

三回裏の時点で二点を入れられてしまった。畜生…

しかもこいつらピッチャーの方も球が速くとても困る。

しかし総合的に見るとそこまで強い相手ではなさそうな気がする。

なんとかして勝ちたいものだ。俺試合でないけど。

「 さあ はじめよう 」

打順は水野。しかし体操服姿がなんか似合う気がする。以外に体育系なのかな？

「 光の速さを超えて 」

キーン！「ファールボール！」

水野の第一球はファール。女子である球に当てれるのはかなりすいことだと思う。

「 時の流れに逆らって 」

キーン！「ファールボール！」

線上のゴロかと思ったたら少しずれてファールになってしまった。これは期待できるな…

「 さあふいにつしゅ…！！ 」

その瞬間水野のバットは空を切った。

フォーク。下に落ちる変化球だった。

このタイミングで突然の変化球は対応できる人のほうが少ないだろう。

初めて使用するのを見るのだから。

「 O H M Y G O D 」

くう水野が打てなかったのはきついな…

「次のバッター！四番、咲野！」

「ひゃ、ひゃい！」

声が裏返っている。

とりあえず宝玉の力が入っているので実力は期待できるが…少しかわいそうだな…

「え、えいつ！」

ピキーン！と轟音が響き、見事にボールは学校から消えてなくなつた。

おお。ホームランだ。

そして4 - 4の同点もまま、打順は水野。この成績で勝負がどうなりが決まり。

「…」

水野はイヤホンをとっていた。

「えいつ！…！」

「ごぎゃああああ！」

すごい音がした。

「ほ、ホームラン二発目だ！」

水野が試合を決めた…！

さて…決勝戦まで来たようだ。

俺たちの戦う相手チームとかの情報ほしいところ…

「次回に続く」

あんまりだとおもつ。

相手チームを見てみると、

どついう相手かだけを教えて欲しいところだ…

「おい！大変だ！向こうのチームやばい！」

「何がそんなにやばいんだ！？」

「相手チームの名前見てみる！」

ん？相手チームの名前？えつと

【OBチーム】

・・・！？なんだこれ！？どついうことだ！？

「大変だ！おっさんとかがグラランドに入ってきてるぞ！」

俺たち勝てるのかなあ？

その時赤石が声高らかに叫んだ。

「最終兵器を使用する！」

現在のメンバー

一番、ライト、刈田

二番、セカンド、赤石

三番、ファースト、水野

四番、サード、咲野

五番、ピッチャー、四代

六番、レフト、佐藤

七番、キャッチャー、【エキストラ】

八番、センター、初代

九番、ショート、【エキストラ】

第三十九話「ラウンドスリイ！デュエツ！」（後書き）

次回はどうなってしまうのか!?

次回の更新は金曜日！

合作話「隣×座席」ドラゴン」（前書き）

6月というのになぜか晴れ渡った空。少し暑いので体は汗をかいている。

そこに昨日の雨によって冷えた風が吹いている気持ちのいい日だった。

そんな時。

「一日だけここに体験入学をする生徒がいます。」

新たな出会いがあった。

合作話「隣×座席」ドラゴン」

初side

(一日体験入学…妙だな…こんな時に、こんな急にくるなんて…もしかして追っ手なのか…)

不安がよぎった。鼓動が速くなり先生の声が聞こえなくなった。

「…【柳川 黒】くんというんだ。よろし…」

柳川 黒。向こうの面子はある程度知っているがそんな名前の奴はいなかったと思う…

いったいどんな技を…もしかしたら何か見せるかしれな…

「あー！！今朝の食パン女！！」

気がつくとも明色さんが指を指されていた。何事？

「…へ？へ？へ？」

明色さんパニック。教室啞然。

「好きな映画のモノマネです！今日一日よろしくお願いします！」

…ハッ！だめだ！油断しちゃだめだ！油断しちゃだめだ！油断しちゃだめだ！

…本当に敵なのかな…

こうして一日がはじまるのでした…

佐 s i d e

な n

赤 s i d e

「あれえ！？俺の s i d e 短すぎない！？」

佐藤が叫んで何事かと思ったが理解。

へー。こういう形式をとっている小説つてめずらしいな。

とりあえず佐藤と俺は今、留学生と会話をしようとしていた。おもしろそうだったし。

となりでは佐藤が「赤石と同じことを言いたかったのに…」と嘆いていた。うっせえ。

「おっす留学生！」

とりあえず切り出してみた。どう帰ってくるかな？

「大変だ。靴下を履き忘れた。」

これを言葉のドッチボールというらしい。

「えっ…えっつとねー」

「何と言う失態だ…この俺が忘れてしまうなんて…」

「もしもーし」

「死ぬつきやねえ！死ぬつきやねえ！無問題！」

この俺がついていけないだと…

咲side

初代君の髪の毛のにおい嗅ぎた… きゃあああ！…どうして私にsideが移ってるの！？

「咲野。顔がにやけてるけどどうした？」

刈田君にいわれて気づく。学校で妄想するのはやめよう…

そうだ。もっと別のことを考えよう。

留学生と初代君が密室で… ハッ！これが妄想なんじゃないの！？

地団駄を踏んだ後。赤石のところへいつてみた。留学生も結構イケメンだなあ…

「助けてくれ咲野。こいつ靴下を忘れたことで頭がパーンなんだ。」

学校に来るのに靴下を忘れる…？まさか初代君とベットに

「どうして顔を赤らめるんだ咲野。」

「いやなんでもないのでよ。」

バカじゃないの私は!?

「君。いい靴下をはいてるね。くれないか?」

「お前ほどのバカを見たことが無い!」

「そのセリフはセクハラよ!警察に突き出してやる!」

こいつド変態じゃないの!

「あれ?そういえば佐藤は?」

「保健室に靴下もらいに向かわせた。」

「佐藤もよく従ったよ…」

「エロ本ですぐ釣れたよ?」

「俺もちよつとダツシユで電光石火。」

「バカ乙。」

「BL本もあるよ?」

「私もちよつとハイスピードで風林火山。」

「咲野。お前のキャラが壊れてるぞ。」

「ごめんなさい。」

黒side

さt

炎side

「うおおおおお!!!主人公はぶるんじゃねえええ!!!小説【無の鱗片】もよろしく!!」

不気味な声が聞こえた。なんなのだろう。

さて、先生の手伝いをしていたら次の授業に間に合いそうに無い。しかたないので開き直ってゆっくりいってみることにした。

すると保健室の前で泣いている少女を見つけた。

「…どうしたの…？」

「あつ…！やっと生徒に会えたあ…」

どうやらこっちから話しかけてくれる生徒が一人もいなかったようだ。

「あのね…クロって奴を探してるんだけど…」

「…フルネームは？」

「柳川…黒…」

なんだ。うちのクラスの留学生か。

「ついておいで。場所につれてってあげる。」

「ありがとう…ぐすっ…」

見ると風呂敷を持っていた。お弁当でも届けにきたのかな。

「ふい〜PAPAPAPAパシリ使い…ふうわぁ!？」

「…あ、佐藤。」

「炎野。いくらお前女っぱいからって幼女を連れるだなんて…つかまるぞ?」

「…佐藤。死ぬ覚悟は出来てるか?」

「…そのあんた。一応私だって無属性の魔法だってできるのよ?」
なんか最近佐藤の言うこと一つ一つがうざい。

「ところでその幼女の名前はなんていうんだい?」

「幼女じゃないわよ!」

「げふう!?!」

おお。ハイキックが決まった。

「…く…まだ大丈夫」

「以外と丈夫なのねあなた。」

「げふう!?!? 感心しながらもう一発蹴るとかやめてくれ!」

ヒ s i d e

まったく! 初対面の女子を幼いとかいうのやめてほしいわね!

私だってだいぶ成長してきたんだから!

失礼しちゃうわ…とりあえず…こいつらについて行ってクロに会えれば

「ヒスイ! ヒスイじゃないか!」

あ、いた。

「ヒスイたん! いっしょに弁当だべよう!」

…

「しほふう！？無言でローキックとか反則じゃないの！？」

くそやるつじじゃないか。

「まったく、弁当忘れてるわよ。」

「今日弁当いらねえよ」

「えっ。」

「靴下もって来たよ。」

「Nice This!」

…

「あ！？やめて！せっかく弁当持ってきたんだから地面に投げつけないで！食べれなくなっちゃっ！」

…ばか。

ウ s i d e

そうして一日が過ぎましたとき。

というかこの小説を書きたいのはただ単にタクミンさんのキャラ使いたかっただけなんだよな。

やれやれ。そして俺は小説執筆を終えた。 23:59。今日の投稿は無理だな。

合作話「隣×座席」ドラゴン（後書き）

なんということだ…

しっかり「ピ」でできてなかったと…

第四十話「ファイナルファイト」(前書き)

前回のあらすじ

作者が眠いせい或少し手抜きになってる気がする。ごめんなさい！
しっかり書きます！ だったらいいなあ

第四十話「ファイナルファイト」

決勝戦。俺たちはOBチームと戦っていた。

そして。

「四十回記念おめでとう！」

「「「イヤツホオオオオオオオオオ！！！！」」」

打ち上げをしていた。

「いやーまさか。中学二年生のころ初めてラノベを読んで妄想を膨らませたら

こんな小説になるなんて、誰が予想できただろうか。」

「というか、俺なんてキャラの引用だしな。赤石はもともとカード小説のキャラだったんだよ。

で、あわよくばそのカードゲームを実際にゲーム化しようとしてたらしい。」

「うわぁ痛いわねそれ……」

「ちなみにリアルのはうでは数枚これの挿絵を書いているそうよ。」

「OPの歌詞だけなら考えてある……」

「結構進んでんのな…あと高校生になったらもう少し文をまとめて本気でラノベ

みたいにするらしい。padで見れるようにネットブック形式

にして。」

「まず高校にいけるようにがんばれだよ……」

「そうだね。」

3-0。 いやね。僕たちも頑張ったと思うんだよ。

でもどれだけあがいたって大人には勝てないのよ。

「ピッチャー交代！咲野！」

ピッチャーは三人目の交代。流石に死にそうだったか

「えっ！？えっ！？どうやってすればいいの！？ねえ！？」

咲野大混乱。かわいい。

「いいか咲野！【エキストラ】に向かって思いっきり投げろんだ！」

「わ、わかったわ！」

「ちょ、おい！？思いっきり投げちゃだめだ！？取れないよ！？」

【エキストラ】があたふたしてるが大丈夫なのか？

「えいつ！」

ゴウツ！ズバンツ！

「135キロくらいでてるんじゃないのかあれ？」

「OBのおっさんぎっくり腰になってるし。」

むっ。これならしばらくは、

ごっぎゃああああああん！！

「体育会系のOBが今ホームランうつたぞ!？」

「まじか!? あんな球を良くホームランにできたなあおい!？」

4 - 0。これはきつい展開になってきた。

しかし俺たちは点を入れることが出来るのか？

果たしていったい…

刈田君が打席に立つ。手に持ってるのは…刀？

「模造刀だけだな…ぶっちゃけままごと用だ。」

ピッチャーの人が球を投げる。

「わりいけど…これは科学的に分析すんなよっ!」

フツ、つと風を切る音がしたと思ったらいつの間にか体育館の天井に

ボールが当たっていた。

「ホームラン!」

4 - 1。まさか刈田にこんな特技があったとは…

「剣術は得意なんだわ。」

赤石が次に打席に立つ。今度はバットだ。

「ちょっとズルいかもしれねえが…こいつをくらいな…!!」

「ハアハア……」

「炎野？大丈夫か？」

フラフラしながら打席に入っている。

倒れないのかあいつ？

「もう…ダメっ…」

バタツとその場に倒れこんだ。

つておい？大丈夫か？

「H A H A H A！ジョニー今のうちにボールを投げるんだ！」

「H E Y！H O I！H E Y！H O I！H E Y！H O I！これでアウ
トだなH A H A H A！」

「H A H A H A！」

こいつら殺すべきだろ。

俺の打順が回ってきた。

「H A H A H A！君！貧弱そうな体をしているね！危ないからどい
てなさい！」

「H A H A H A！」

俺はどれだけ馬鹿にされてもいい。

「ただ…仲間を侮辱するやつだけは…」

唸れ…俺の一本足打法…！！

「ゆるさねえ！」

バギヤアア！

4 - 5。これで俺が主人公だということが全員に分かっただろう！

「よっし！次の会抑えたら勝ちだ！気を引き締めていくぞ！」

そんなことを言ってる真っ最中。レフトである（最終兵器）俺の場所にフライ。

ふっ。こんな糞フライ。余裕でキャッチだ。

ボールを出そうとグローブを出す。グローブがボールをキャッチする。

その瞬間。ブチッ！

グローブの紐がきれてボールが顔面直撃。

「オウフッ！？」

あ…ボールを追いかけなきゃ…でも体が…

気がつくくと守備は終っていた。

「5・5！しまつて最終回点取るぞ！」

「「オオー！」」

そこには赤石たちが円陣を組んで気合を入れている姿があつて。

「5vs1！すぐさまぼこぼこにするぞ！」

「「オオー！」」

そこには【エキストラ】たちが俺をぼこぼこにしようとして。

「…」

「…」

「ゆるし」「ダメだ。」「」

神様のいぢわる。

ここからは効果音だけでお楽しみください。

「ウオオオオ！」

「ハヤアアア！」

「ウオオオオオ！」

「初代！そつちだ！」
「でやあああああ！！！」
「はいやあああああ！！！」
「もらったあああ！！！」
「H A H A H A H A ! ! ! ! !」
「ぬおおおおお！！！」
「佐藤は俺の嫁。」
「でりやあああ！！！」
「ほいさあ！！！」
「にげるおおおおお！！！」
「点とるぞおおお！！！」

延長十二回の末。

6 - 6。この一球を抑えれば。何とか引き分け。

ピッチャーは咲野が限界なので俺に。

俺が抑えられるのかOBを…

「…！！！」

しゅっ　すぱん！！

「やったあああああ！！！同点だあああああ！！！」

負けるよりはました！めっちゃくちゃうれしい！

「いや。私たちの負でいいよ。」

そんな時。OBチームの代表が言った。何ゆえ？

「私たちは大人だ。ここで手を引こう。」

紳士や。このおっちゃんたち紳士や。

こうして俺たちは野球大会一位を収めた。

さあ次はサッカー編だ！

第四十話「ファイナルファイト」(後書き)

長かった野球編も終わりです！
次は金曜日の更新に！

第四十一話「ライジングじゅっいち」(前書き)

前回のあらすじ

約一ヶ月間放置していましたが…

今回！無事！めでたく！

完結いたしました！ウォーズ先生の次回作にご期待ください！

まだもうちょっとだけ続くんじゃないよ。

初代「具体的には？」

あと二百話近くは予定してるぞ俺。

佐藤「終るのか？」

二年後くらいに終るんじゃない？

赤石「どうしようもねえなこれ。」

何もともあれ、サッカーの話です。

第四十一話「ライジングじゅうち」

「佐藤ー。サッカーしようぜー！」

「しようぜ、じゃなくてがんばってやるんだよバカ野郎！」

というわけで野球のあとはサッカーとなった。

俺たちは野球の練習をしっかりとやっていたのでなんとか一位になれたが、

サッカーのほうはあまりやってないので、ぼろぼろの予感が否めない。

どうしようね…

「まあいいや！くよくよしたって仕方ない！対戦チームを確認しようー！」

【OBチーム】

またお前らか。

「これより一年生対OBチームの戦いをはじめます！」

「「「「お願いします！」」」」

「赤石！こつちだ！こつちにボールをパス！」
「おらあ！…あつ、しまった、つまさきにあたった…」
「方向なんか気にしないマイウェイ…」
「うわあ！ボールとられた！」
「やべえ！ドリブルを止めるしかない！」
「…もうだめだ」
「はずせえ！シュートはすすんだあ！」
「やった外れたぞ！セーフセーフ！なんとかなったぜ！」

人はこれを泥沼試合という。

「と、とりあえずスローインするぜ！」
「おk！こいや！」

赤石がボールを投げ、

俺がそれをトラップ。そして逆サイドにいる水野につなげば…

バン！ と俺のインサイド（内側）に当たり、

ポーン！ と俺の頭の近くまで上がり、

パシッ！ と俺の手に当たる。

「ハンド」

「バカ野郎がああああ！！」

「ごめええええん！！」

「相手のフリーキックに備えて！」

くう…やはり戦力差がひどすぎるなあ…

べしっ！つと相手のお兄さん方がボールを蹴る。かなりの球の速さだ。

「僕がヘディングでセンタリングだ！」

「おお！」

初代はジャンプでヘディングを狙う。

スカツ と頭を振ったらずれ

バシッ と左手に当たる。

「ハンド」

「…殺してくれ」

「いいんだ！誰も初代を攻めちゃいない！」

くう…どうしようもない。

試合はすすむ。

OB達の激しいパスワーク。

「スライディング」

「ナイスだ水野！」

水野のスライディングでボールが赤石に移る。

「俺が決めるぜ！」

赤石のドリブル。

目の前から来るお兄さんたちをルーレットでかわす。

「おらぁ！」

シュートを放つ。ゴールポスト。

「俺がフォローだ！」

俺も負けじとシュート。ゴールポスト。

「僕も行くよ！」

初代がさらにダメ押し。ゴールポスト。

「わ、わたしもいくわ…！」

咲野がもう一発。ゴールポスト。

「ダメだ！俺たちはもうだめだ！ここで終わりだ！」

「いやでもなんでこんなにゴールポストに当たってるんだ！？」

よくよく見るとゴールがずれている気がする。

これルール違反じゃないのか！？

「くっ…ちょっとタイムだ！」

赤石がタイムをかける。

仕方ないといえば仕方が無い。

「どうするんだよ……」

「このままじゃ負けちまうぞ……」

「畜生畜生……」

【エキストラ】たちのざわめき。くう……ほんとうにどうすればいいんだ……

「もうこうなったら……」

「初代？」

「正攻法じゃなくしよう！相手だつてずらしてくるんだから！」

「してその方法は？」

一般的な不正じゃばれてしまう。今からできるばれにくい不正って……

「プレゼントボールしかないな。」

プレゼントボール 簡単に言つと相手の体にボールをぶつけること。

「HEY！ジョーニ！あいつらすごい勢いで俺たちの顔面にボールをぶつけてくるぞ……？」

「H A H A H A！これがうわさのクリケットってわけさ……」

「H A H A H A……！！……」

「くそくらえ！天誅だ！存在自体卑怯なんだよ！」
「オビヒロツ！？」

「なあ…初代ってあんなに恐ろしい人だっけか。」
「さあ…？」

顔面にボールをぶつけられて倒れてる人が十一人中九人。

あとはキーパーをなんとかするしかない…！！

「おらぁ…！」

初代が似合わぬ声を出し蹴りだす！

キーパーの手の先にかすってゴールネットを揺らした！

「ゴール！」

「「「やったああ…！！」「」」

よし！作戦は成功だ！

これで光明は開けた！

「よし皆！」

「「「ああ…！！」「」」

皆の意気込みを上げるために俺は声を上げる。

「あとこれを四回繰り返すんだ！そうすればかてる！」
「「「ああ！」「」」

現在 1 - 5

この戦いを見た先生はこう語る。
「ありゃサッカーじゃねえっす。テレビじゃ流せないっす。」

「OBチーム！負傷者十名！よって一年生の勝ち！」

OBの皆さん。ほんとうにごめんなさい。

「これがお礼参りってやつなの？」
「逆じゃないのかな？」
「どっちも違うと思っすよ……」

第四十一話「ライジングじゅうち」(後書き)

久しぶりです！

一ヶ月も放置してすみませんでした！

これから二週間の間はかけますので
カリカリ書いていきたいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5699j/>

僕の隣の座席はドラゴンです。

2011年10月6日17時14分発行